

古史傳

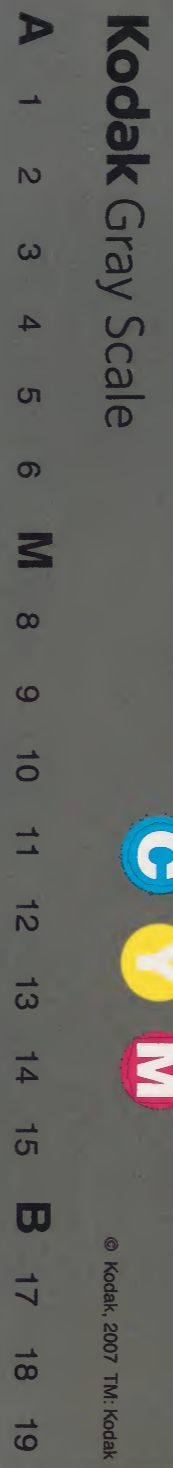
自第十五段
至第二十一段

五

和書門	
四二五	九號
三一	函
二	架
二	冊

內閣文庫	
九	和書
四	號
二	冊
一	架

內閣文庫	
番號	和 94
冊數	27 (5)
函號	140 184



古史傳五出卷

九四

神代上五出卷

平高祖御孫

伊弉諾

伊弉諾

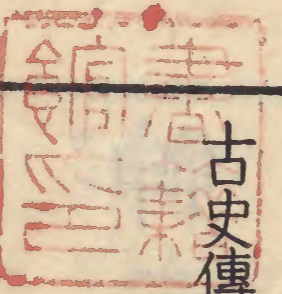
於是伊邪那岐命拔御佩虫十

拳劍而斬其御子迦具土神而

為給三段矣爾於其御刀出刀



五十



古史傳五出卷

和九四 辨

神代上五出卷

町田久成獻納之章

平篤胤謹撰

男 鐵胤 孫 延胤

淺草文庫



於是伊邪那岐命拔御佩出十

拳劔而斬其御子迦具土神而

爲給三段矣爾於其御刀出刃

○古史傳五

一

垂落出血シタビル激上而チ爲天出安河タバレリノボリテナリアメノヤスノカハ
 原在五百箇石村矣ラナルイホツイハムラトキマタヨリソノ復於其御ニ
 刀出鋒垂落出血ハカレノサキシタル激越其磐石チ
 而成坐神出名テナリマセルカミノ三十八イハサクノカミツギニネサクノ磐裂神次根裂
 神二神矣カミフタバシラマス此神出子コノカミノミコイハツノ磐筒出男ヲノ

神次磐筒出女神カミツギニイハツノメノカミコハ此者經津主フツヌシ
 神出御祖也カミノミヤノオヤナリマタヨリソノ復於其御ニ刀出ハカレノ鑢ツミハ
 垂落出血シタビル激越其磐石チ而成坐タバレリツキソノイハムラニテナリマセル
 神出名カミノミヤノオヤハヤビノカミヒトバシラマス此神コノカミ
 出子ノミコ燐速日神ヒヤビノカミ此者建御雷出ハタケミカヅチノ

男神出御祖也。是時出血。激灑

而。深石礫樹草。此草木沙石。自

然含火出縁也。故所斬出御刀

出名。謂天出尾羽張。亦謂伊都

出尾羽張神。亦謂稜威出雄走

神

御佩之は下御刀此處に注ぎを見て辨ふはし。○十拳劔

は師云登都迦都留岐と訓る。八拳鬚七拳脛おどの例

れ也。能を添て読を己ろし。まに劔を多知とも訓る例多

て幾搏と物の長さを量れるれ也。然爲るおと今も遺れ

纂疏も柄之量とあるに都加と云語不たきて誤也
給へるあり柄を都加と云は握む処ある故れり
也。劔のあとには下第七十段都牟川之大刀の処に注せ也。○三段は師云
段を伎陀と訓むと和名抄に筑前国鞍手郡新分爾比岐
多とある。此分字哉。岐多と云う同じ。豊後大分郡も本は
たほまだあり。景行紀に碩田をかきて於保岐陀と訓注
有也。○御刀を師云。景行紀に御刀此云彌波迦志とある
に依て訓む。倭建命段に波加志と有。佩を延多依言
れり。はて御佩給ふ劔と云ふを其用言多體言。不言ひ
あして即其物の名とあること。御執給ふ弓を御執と云
ふ同じ。此格古も今も万。○垂落之血。血は知と訓む。師
云。

阿世と訓を非あり。血を阿世と云は齋宮の
忌詞ふあそあれ常ふ然よまむは由あり。○激上而此
三字を本ふ無を。予が私ふ加とるれ也。其を此垂落る血
天之安河原あり。磐群と化まれば。激上れる事論ひ無れ
ばあり。○天之安河原也。安下ふ之字を加すても書ま
天上ふある河原あり。名義師云。古語拾遺に天八湍河原
也。も有れど。彌瀨之河也。書紀に天八十河中とあるも
通ふ音と云ま死。はて此河名は下此段もも見えて皆
あり。同河あり。師云。神代の天上に故事を云ふ。皆この河名を
らでと流のいく筋も有て大なる河を云ふ。云ふと
云まおれど。然ふは非は其を天上ふ山と云ふ。香
山と云ふが如く。河を此河山は彼山に限り。云ふ妙
あり。由ある事あり。字やあ次云を見て知べし。万葉

娑囊サカトと何ナ也。名義也。師云。式の祝詞。磐根木根履佐久彌
 氏。万葉二。石根佐久見手名積來之。ナツミコ重山伊去割見ともま五百
 二十。卷子ハ浪の間多し也。あど有ルを。或説ハ。人面オモ此ニあく
 ぶく何ナるを。志やくみねと云ふ同シて。岩イハ此ニ凸凹ツクハ何ナる
 上を。通行トく字云ハ也。馬ウマけくニ也。云も能レの面オモ。けくみ
 ぞ云ハグあゆも同シ詞ありと云ハ。此意ハれルはシ。源氏物語
あざかし死をさくぞ也およげあると何るも平穩あ
ら然意ふて同じ或説ハ岩根をも履裂て行ありと云ハ
見ル ちて此神名は石根拆イハネササと云言を二ツ分ちて。二柱ニタ小
 名けある物あれど。根も石根の意ハ也。○此神とは磐裂
 根裂神を申せ也。但し此ハ神代紀下卷ハ磐裂根裂神之
子磐筒男磐筒女所生之經津主神と何

る小依 ○磐筒イハツク之男神。磐筒イハツク之女神。名義。磐は御親神の磐
てあり 小同心。筒を借字ハて。都知ツチ小通ヒ。塩土老翁を塩筒と其
 都ツ例レの之ハ通ヒ辭ハ知チ女男共ニ云ハふ尊稱ハ依ル也。
上小云也。第二段ハ葦アサ牙カ比ヒ。○此者。經津主神之御祖也。經津
古遲神の処 主神ニ皇美麻命ニ天降坐リ時ハ功コトの卓越スグレ坐マて。名高
 き神ハ坐リ故レ也。此ハ其御祖ノ成坐リ因キは。まね其ハ出デ自ラ
 残ハ知らズ志ハ也トる傳ハ也。さて經津主神の名義を下 ○鐔タテ
第百十三段傳ハ云ベシ 和名抄ハ。唐韻ハ曰ク。鐔タテ。劍ツルギ鼻ハ也。和名都美波ツミナと何ナ也。今都婆ツバと
 云ハ物ハ也。○甕速日神ニ師云。美迦波ミカハ夜備ヤビ。訓ハ也。今云ハ
小之を添て唱ふるを非ぬことまよ備と濁るべき由も
第三十四段勝速日命の処ハ師説を注考を見れば

神之御祖也。建御雷之男神也。皇美麻命此御天降の時。功此卓越坐して。名高き神小坐故。此小其御祖此成坐る因。未おそれ出。自を知らぬ。久と伝ふ。師は古事記小依て。此神と布都主神とは。一柱小坐りよし。委曲小解置れおま。熟考ふ。依小。此小二柱小坐て。一柱の如く。一柱うと思ふ。ば。此處小成坐る御祖也。詳小別て。正あ。二柱小して。其差の鬚。志死は。幽死所以あ。依事トオボと所思也。依由あり。其下小云へり。第一百十三段小。武甕槌之男神の亦名の出さる處○此時之血とは。火神を斬給へる時小。激上れる血を云て。即火あり。○激灑而。深石礫樹草とは。其火此

天上小激上れるのみあら。此因土あり。石礫草木小も激タツと著ととあ。○草木沙石。自然含火を。聞え。多る儘あれど。此は。あ。其。一端を云る傳ふ。實ハ物と。火を含まぬ物れ。其は石と金と。火焔含。久る事は。更も云を。木と木を。麟キりて。火焔出。海底小生。出る物。子小。火は含。は。有る小れも。其下見えと。櫛八玉。昨。出。て。火を。鑽。出。さ。る。残。以。て。知。る。べ。し。○天之尾羽張。師云。或説。は。尾を鋒を云。云。劔を。諸刃。小。て。鋒。の方。此。張。は。る。物。あり。故。云。云。因。名の尾張も。熱田此神。劔を。出。て。此意。れ。と。云。云。此説。然も有。然。見。鋒。を。尾。と。云。こ。と。い。は。ま。ど。例。非。峯。の。張。と。る。劔。

を云ふるは。はと尾を雄とて。雄は去死を云ふも有は
し。稜威之雄走とも云名の。稜威之雄誥。羽を刃は意あ
ど云言は連きを同きをも思ふべし。羽を刃は意あ
はべし。今世り波婆理と云針を刃の扱きとる針と云意
じまよ物此満をびある事。伊都之尾羽張神。稜威之雄
をばぐるると云も意近し。走神前ふは直ふ。其御刀残さして云。故ふ神と云。けり
残。此を其御霊を云ゆふ。神を云。さて伊都は。本ふ稜
威此云。伊都と有は採れ。師云此は。伊知速の伊知と
同言ふて。知波夜夫流の知も是あり。此等の詞此意を冠
條よ委。けり此言は例は。稜威之雄誥。稜威之道別。稜威之
く見也。噴讓れと云て。武きを云言あり。稜威字を文選に見えと
ゆ。けり漢書よ。威稜。懺平

隣国注よ。神聖之威。曰稜と。ゆ有。信友云。此伊都は。武
ゆ。この意ふてぞ書れ。む。死を云言れ。はと伊豆とも云て。齋清淨。ける意ふも
云ふ言あり。伊豆能賣。嚴彌都波女。嚴山雷。云言いせ多し。
れどの伊豆。去あをち是ふて。もと同言れ。健きふは清
く。清死ふは健き意あり。熟く味ひて知はし。と云。此
信友が正卜考ふ。委く考。て記しかるを。説。けり雄走
長れ。此処。ハ。何らまし。を取て記し。けり。雄走
とは。師説ふ。雄は上ふ云。る如く。雄は去死を云ふ。走を劍
の利をいふ。利を疾と同言ふて。走と意同じ。俗は口利く
走ると云。せ。何。けり。上。件。此。神。等。は。此。御。刀。は。御。霊。也。火
も同じ。神の御霊とふ因て。生坐。し。あり。其由。下。ふ。○此段。ふ。御

名れ出るる神等。御刀の御霊、去はて八柱あるを。此時成
坐る神也。磐裂神。根裂神。甕速日神のみ。て。磐筒之男。磐
筒之女神。燐速火神也。經津主。武甕槌之男神の出自を語
ると。此處に御名れ出るとあり。此者經津主神之御祖
之御祖也。とある文。ちて。磐裂根裂神。甕速日神。去はて
心。御刀を火に因て化れる。石村ふ所生れど。分て云は
磐裂根裂神二柱也。石村ふと也。其た始に御刀の刃をり
垂落れる。血は化ると。磐
村の磐てふ語を名に負坐し其子をも。石
筒之男。石筒之女神と申は思ふ。去はし。甕速日神也。御
刀ふとれ也。第百十三段に。稜威之雄走神之子。甕速日神
之子。燐速日神之子。武甕槌之男神とあるを
思ふ。かくて石ふ因れ依神也。二ばしら成坐し。其子も石
筒之男。石

筒之女神。御刀ふ因れる神也。一柱成坐也。其子も燐速日
神一柱あり。
此を幽き謂ある事。あはれれど。凡人は測知るはきま
とふ非也。但し磐裂神。根裂神。二柱。磐筒之男神。磐筒之
し。二柱。ふして一柱。ふ坐。あらむ。思ふ。其た神代紀に。磐
裂根裂神之子。磐筒男。磐筒女。神之子。經津主神とある趣
の。あ。聞。も。る。を。第。十。二。段。神。五。神。也。と。扱。そ。れ。火。を。御。刀
の。下。ふ。云。依。説。ふ。思。ひ。合。せ。て。曉。は。し。扱。そ。れ。火。を。御。刀
ふ。因。り。て。成。坐。る。二。御。胤。の。神。也。正。去。く。二。柱。ふ。し。て。經。津
主。神。武。甕。槌。後。ふ。一。柱。と。坐。ま。し。て。其。を。稜。威。之。雄。走。神
神。を。申。は。し。の。御。霊。あり。ち。て。劔。加。火。は。燒。死。ま。し。石。ふ。研
れ。其。用。を。外。去。物。れ。ま。す。火。を。御。刀。と。ふ。因。り。て。成。坐。る。神。等。
み。あ。武。甕。槌。神。は。德。を。助。成。し。て。其。功。は。去。は。て。此。神。ふ。約

ま^マ。因^{クニ}生^ウ固^ミ免^カ坐^タる。二柱^ニ神^ノの大^{オホ}正^ミ統^スを坐^マ。皇^{スミ}美^マ麻^マ命^ノの
天^{アメ}降^リ坐^マして。此^{コノ}因^{クニ}土^{ツチ}所^シ知^レ看^メ以^テ時^{トキ}。此^{コノ}因^{クニ}土^{ツチ}荒^シぶる神^ノを
言^{コト}向^ムま^マ志^シ。伊^イ邪^ヤ那^ナ岐^キ大^{オホ}神^ノ。此^{コノ}時^{トキ}の御^ミ稜^{リョウ}威^イの。其^{ソノ}時^{トキ}顯^アれ
ゑるふ^ハと^ハは。幽^ユき^キ謂^ユ何^ニる^ルと^ハれ^ルも。此^{コノ}段^{ダン}に傳^ツふ
因^ユて。悟^リ得^ルお^ハるこ^トや^ハれ^ル年^{トシ}あ^ハ依^ル。其^{ソノ}は^ハ火^ヒ神^ノを斬^ツ給^フへ^ル。御^ミ刀^{タガ}
此^{コノ}刃^ヤと^ハり垂^シ落^ルれる血^チの。天^{アメ}上^ノに激^シ上^リて。ま^マ於^テ五^イ百^{ヒャク}箇^ノ磐^{イハ}
村^{ムラ}と化^ナて。は^ハと其^{ソノ}鋒^{サキ}と鑢^{ツル}と^ハり志^シと^ハり依^ル血^チも。悉^シふ其^{ソノ}磐^{イハ}村^{ムラ}
小^コ激^シ越^ス死^スて。神^ノ等^ノの生^ナ坐^マるを想^{オモ}ふ。火^ヒを如^カ此^{コノ}生^ナ出^リし初^{ハジメ}
と^ハて。上^ノに昇^{ノボ}る勢^{イキ}氣^{ホヒ}何^ニる物^{モノ}も^テ。今^{イマ}現^マも其^{ソノ}如^カく。燃^ヒ立^チお^ハ
勢^{サセ}此^{コノ}昇^{ノボ}て何^ニる依^ル。深^{コソ}き謂^ユあ^ハ依^ル事^{コト}ある^ルに^シ。天^{アメ}日^ヒに御^ミ因^{クニ}

を^ヲ目^メに^テあ^ハる^ル見^ミ放^サ奉^ルる。火^ヒの盛^シふ燃^ヒて見^ミゆ依^ル。此^{コノ}
傳^ツ乃^ハ謂^フふ依^ルて。火^ヒの寄^{ヨリ}憑^{ツキ}て有^ルる故^ユ。此^{コノ}因^{クニ}土^{ツチ}と^ハては。燃^ヒる
火^ヒに見^ミゆる^ルあ^ハ依^ル。然^シ在^ル。天^{アメ}を^テ其^{ソノ}萌^{モウ}騰^{トウ}する初^{ハジメ}と^ハて。
澄^{スミ}明^{アカ}き質^{モノ}れる^ル上^ノに。火^ヒに寄^{ヨリ}憑^{ツキ}る^ル故^ユ。は^ハと^ハり明^{アカ}く。
此^{コノ}後^{ノチ}日^ヒ神^ノの所^シ知^レ看^メ以^テ去^リと^ハり爲^スて。その大^{オホ}御^ミ光^{ホウ}に照^ア徹^{トス}
坐^マして。彌^ニ益^ク明^{アカ}れ^ルぞ有^ルける。外^{ソト}因^{クニ}人^{ヒト}あ^ハる^ル斯^カ在^ル謂^フの
の因^{クニ}土^{ツチ}を^テ見^ミ放^サる^ルま^マ。日^ヒハ火^ヒの凝^{コウ}集^{シユ}れる物^{モノ}ぞと云^フ
ひ。或^シは火^ヒ精^{セイ}ぞあ^ハどのみ^ミ云^フ免^カる^ルを。神^ノ代^{ノチ}に古^コ傳^ツに傳^ツら
ざればあ^ハり^ル也^{ナリ}。但^シし其^{ソノ}外^{ソト}因^{クニ}人^{ヒト}こそ然^シも有^ルら^ル免^カ御^ミ因^{クニ}
人^{ヒト}を^テ思^フひ^トら^ル也^{ナリ}。其^{ソノ}説^{セツ}を^テ此^{コノ}に信^シじて。此^{コノ}に古^コ傳^ツを尋^ミむもの
い^ハや悲^カしく^シこそ。は^ハと^ハり因^{クニ}土^{ツチ}を^テ打^ツ見^ミては。火^ヒに見^ミゆ依^ル
を以^テて。神^ノの御^ミ世^ヨと^ハり。比^ヒとは云^フる依^ルあ^ハ依^ル。然^シる^ル河^カ比^ヒ賣^メ神^ノ

の哥よ青山ふ比が隠らぬ玉の夜を出あむと詠る
比を天日をさして云るあり猶此哥此ことハ第九十八
段よ云ふ然在む燃る火と言義の異れる事形きを漢字
を見べし。參渡して後ふ天抄比ふは日字を以て燃依比ふを火字
を當とるを以て言義の異れるが如く思はる。此乃
元の謂を深く考へざればあゆ。さて然天抄日よ寄憑る
火氣此虚空ふちで満て。至らぬ隈なく産靈此神靈を佐
けおく。地よ照入り。土氣鹽氣火氣相和ちて千ぢふ變て。
万劫ふ化して。彼硫黄塩硝あど云を始久くさくか
る類の物此多うるを皆これふ因て成る
物類を生成して。青人草此要を爲し其産し成せる草
木を以て火を集むれど大如くも小くも凝集してそま燃

盡れば灰と化て残て。まよ此を分れど土火氣は元の虚
と塩と分る地。火氣は元の虚
空ふ歸る。されど火産靈神の徳此あらはしふは有ける。
實よ火むうで奇靈ある物を有らしむを思ふ。是に就て
く妙ある事物此称言よ比てふ言を云を世よ火むうめ
奇異き物のあき故に其名を借て弘く言ひあらるるあ
らむ。あ不次く言
ふを見ゆるし。

六十
爾其被殺坐出。迦具土神出御
骸出。每段各化神矣。於其一段

ナリマセルカミノ 三十八オホイカツチノカミツギニソノヒト
 成坐神出名大雷神次於其一
 キダナリマセルカミノ 三十八オホヤマツミノカミツギニ
 段成坐神出名大山祇神次於
 ソノヒトキダナリマセルカミノ 三十八タカオカミノカミアハセテ
 其一段成坐神出名高靈神凡
 三神矣一傳云迦具土神出於
 津見神次於膏成坐神出名正鹿山
 滕山津見神次於腹成坐神出

三十八オクヤマツ見ノカミツギニ
 名奥山津見神次於陰成坐神
 ノ名闇山津見神次於左手成
 坐神出名志藝山津見神次於
 右手成坐神出名羽山津見神
 次於左足成坐神出名原山津
 見神次於右足成坐神出名戸
 ヤマツ見ノカミツギニ
 山津見神
 アハセテ
 并八神也
 被殺才許呂佐延と訓法し。佐延才佐礼の古言。御骸ハ。
 美加婆禰と訓て。幹骨の義解る法し。ラは省かゆ保と婆

○大雷神。雷ハ。師説ふ。万葉三ノ伊加土佛足石の御歌ふ。
伊加豆知。おまら此名正しく見ゆとるなり。名意ハ嚴
ふ。豆ヲ例の之ノ通ふ助辭。知ハ美稱也。と何れ。さて
伊加豆知と云言義ハ。師説此如くふして。其伊加豆知と
名ノ負る物を。普く考テ通ハ。凡て猛く嚴きをバ。神字
も物を弘く稱ふ古言あり。其を火神を火雷と云
ひ。山積神を山雷と云ひ。武甕槌神を健雷と云ひ。天忍雲
根命を鳴雷と云ひ。此事第四百四十三段ノ委注ベシ。はと三諸岳神の大
蛇の形ありしを雷と云る。此事ヲ雄略天皇卷ノ見えとめ。外どを以て。
剛く猛き物字。ひろく稱ふ言あるを曉べし。下ノ豫母都醜女を雷と

云り。合せ。けて伊加豆知とは。かく弘く言稱ある哉。世ノ
考ふべし。雷神也。嚴く猛きハ外也。故ノ專この神也。稱とを
ま依あり。然る例ハ。扱也の御骸也。ま於此神の成坐る也
也。伊邪那岐大神也。甚く怒坐して也。御所爲也。依ふ況
て御母神也。心惡子と詔するば。之の。猛く剛き火雷神
也。殺けえ給ふ。そ也。御怒も有べけ。始ふ此神の生出
給ひ。むこと。然有法き理也。外此神也。德此事也。下ノ委云を考合せべし。
神名式。和泉国大島郡大雷神社。大宇今。本火と作るを。今ハ信友ガ異本三ノ字
校合せて改とる。依れ也。ま。雷を
電と作る本も有り。同じ也。とあり。越前国丹生郡雷神
社。但馬国氣多郡雷神社。名神仁明天皇紀。承和九年十月

北政預官社。清和天皇紀。貞觀十年十二月廿七日。從五位
下雷神從五位上。とあり。はと此とゆ以前。文武天皇紀慶
雲三年七月乙丑。丹波但馬二國山災。遣使奉幣帛于神祇。
即雷聲忽應。不撲自滅。と云事も見えとす。まゝ文德天皇
紀。齊衡元年四月丙辰。授河内國大雷大明神從五位下。と
あり。○大山祇神。祇字ハ津見と訓也。清音あり。豆美と
濁して唱るハ非
お名義。縣居大人の師説ふ。津を例の之ふ通ふ助辭。見を
比ふ通ひて。かの産靈れど此靈あり。けり津見を。禍津日
神。庭津日神。おど此津日也。義同じ。と云れとる。ふ從ふ法
し。神名式ふ。伊豫國越智郡大山積神社。名神大。○名神祭
式。此神のあき

を脱とるあり。其承和四年四月。改曆雜事記曰。崇峻天
皇。御宇庚戌歲。伊與國越智郡三嶋大明神出現。光仁天皇
寶龜十己未。自伊與此處鎮座也。乃大山祇尊也。とあり。○
當國風土記。小宇知郡御嶋坐神。御名大山積神。一名和多
志大神也。是神者。所顯難波高津宮御宇。天皇御世。此神自
百濟國度來坐。而津國御嶋坐。謂御嶋也。とあり。此神の百
濟國より
度來坐。り云記。いぶらき傳。おれを。高津宮御世と
云説。由り傳ふるべし。けりハ。お此神。今も大三島を
云島。鎮坐。由りて。其三島と云ふ地名。小津國の三島
をゆり移せる名あり。當國より。高津宮御世。まで津國三島
を坐るを。故ありて。當國より。移しとることを。詠り傳ふる
おらむ。と思ハるれ。おり。一名を。和多志大神と申れも。
他所。度し奉る。依り。由りて。の御名。あるべし。他所へ移し
とるを。和多須と云る例。を。五十猛神の御妹。大屋津比賣

本株の中らふけし立るあり古も然あるを本末を山神
お祭ると云ふらむ他國にてをあり為依り問ふべし
と何にほと山口お鎮坐山神ありを祭る詞小山口坐
皇神等此者山神お坐事こと上お引る能前爾白久飛鳥
高市石寸市忍坂城上長谷同お火高市耳無郡登
御名者白豆考云其社の在所を御名と云おせるあり凡
を月次新嘗お祭らるはて畝火耳無を孤立し山ふて今
おてた宮材とお依べき木をあら祓どいと上代は出此
六の山を採初られし故有て諸國おて採せら依り
もま扱こ此山口の社を祭りふ事とや成おらむ
遠山近山爾生立留大木小木乎本末打切互持參來氏考
遠き山を諸國の山あり万葉お藤原の宮造此材を近江
の田上を此外四方此國くとゆ持參る事を云ゆ是を以
て此を知べし近き山をこの六に皇御孫命能瑞能御舍
山のみあらび出依て近きを云ふ

仕奉氏天御蔭日御蔭登隱坐氏天の雨の借字おて雨を
屋あるを文ふか安因登平久知食須賀故皇御孫命能宇
く云ひぬせり安因登平久知食須賀故皇御孫命能宇
豆乃幣帛乎稱辭竟奉久登宣と何るを以て知依りちて
此祝詞お見え給へる山口乃社は式お大和國高市郡
飛鳥山口坐神社大月次新嘗この社を今飛鳥村同郡
畝火山口坐神社大月次新嘗この社を今飛鳥村同郡
十市郡石村山口神社大月次新嘗この社を今飛鳥村同郡
正しく同郡耳成山口神社大月次新嘗この社を今飛鳥村同郡
と或書城上郡長谷山口坐神社大月次新嘗この社を今飛鳥村同郡
子云り同郡忍坂山口坐神社大月次新嘗この社を今飛鳥村同郡
牙り同郡忍坂山口坐神社大月次新嘗この社を今飛鳥村同郡

と或書ふやある即是也。此御社とも何をも清和天皇
云へり。紀貞觀元年正月廿七日。正五位下を授奉。給へり。亦本
此外ふ。山口神社と申はぐ多く有て。添上郡夜支布山口
神社。大月次。文德天皇紀。嘉祥三年十月辛亥從五位下。清
和天皇紀。貞觀元年正月廿七日。正五位上。去の社を今大
在て天王と稱と或書ふ云。平群郡伊古麻山口神社。大
和名抄ふ楊生也。木布とあり。次新嘗。○去の社を椋原村と云ふ。在
て。今を滝宮と稱よし。或書ふ云へり。葛上郡巨勢山口
神社。大月次。新嘗。○此社を今関屋同郡鴨山口神社。大月
嘗。○去の社を帳考ふ。在。俱尸羅村。高鴨山。葛下郡當麻山
松樹一株。下。在小祠。土人云。樹頭時見。靈灯。葛下郡當麻山
口神社。大月次。新嘗。○大より下五字本。脱とるを信友
が一本。依て補ひ。大十三座とある。了合りと云

る。小從ひ於この社を高雄寺山口の薬師堂同郡大坂山
の西。在て。今新宮と稱よし。帳考ふ云。野山。口神社。大月次。新嘗。○去の社を穴蒸村と云ふ。吉野郡吉
野山。口神社。大月次。新嘗。○此社を龍門莊山口村。山
邊郡都祁山。口神社。大月次。新嘗。○去の社を山口村。山
ゐるも。凡て山神を知はし。けり。伊古麻山。口神社。をゆ下。
七社。竝ふ。貞觀元年正月廿七日。正五位下を授奉。給へり。
はて祝詞を見え給へる六社の中。四社を並り。山口坐
とあるを。夜支布山口神社より。下八社は坐と云。さるハ
何あ依。由了。又祝詞を見え。さる六社とゆ。位階。次段。小
の高く坐候。ことも。何ある由。未考へ得。交。引る。四時祭式。廣瀬大忌祭。條よ。是日。以山口。十四座。合祭。
と有依ハ。此御社ともれ也。はと山城。国愛宕郡。賀茂山。口

神社何也。清和天皇紀。貞觀元年正月廿七日。從五位下を
授奉り給へ也。此も山神ふ坐候こと。云ふまでもあらざ。○高靈神。靈ハ御紀
ふ。此云於箇美と見え。記よ後於加美と書る。小依て訓法
志。字書小龍也。又靈神也とも何也。まゝ靈字とも通ふ。名義師説了。
於加の意を思得祿と。美は龍蛇の類也稱あり。和名抄ふ。
水神まゝ蛟を。和名美豆知と何る美まきれ也。豆を例の之ふ通ふ
辞。知を等稱して。野椎おどの例此如し。はと蛇蝮れぞ此美も此あり。まゝ日
を美を訓るも。此意あるはし。景行天皇卷ふ。天皇豊國ふ行幸依時ふ。御
膳ふ仕奉依人泉水を汲ける。蛇靈の居と何し。のば天
皇必將有莫莫令汲と勅牙依去と有り。万葉二ふ。吾崗之

於可美爾言而令落雪之摧之彼所爾塵家武と何る。おれ
らを思ふ。此神ハ龍ふて。雨を物去る神れり。せ云れと
依が如し。けて高と申は。靈神の何依が中ふ。此を初
生出まゝて。其を統領也給ふ故ふ稱あるはし。けて此も
いぞ猛き物おま。御父子此御怒よ因てぞ成ふ。甚
怒りて死し人おとの後ふ雷ふあり。蛇ふありて復出る
こと。昔も今も多た。是故ぞ古くハ上毛野君由道の靈
の大蛇と化りて蝦夷どもを殺し。神名式ふ。備後國甲奴郡ふ。
意加美神社。惠蘇郡ふ多加意加美神社。河内國石川郡ふ。
太祁於賀美神社。志。今在古市郡大黒村。称山王。を云り。
法きり。まゝ式ふ。此社ふ並て。建まゝ茨田郡ふ。意賀美神。
水分神社も何也。由何る事あり。

社。志小。在伊加賀。和泉。固和泉郡。小。意賀美神社。志小。武塔

上。村。後。山。と云り。日根郡。小。意賀美神社。越前。固坂井郡。意賀美

云り。神社。壹岐。嶋石田郡。固津意加美神社。志小。由り。此社

在。今。武生。水村。小。大和。固吉野郡。丹生川上雨師神社。名。神

次。新。嘗。○。雨師。字。本。小。脱。さ。る。を。今。諸。書。小。依。て。加。へ。さ。り。

さて。雨師。と云。も。漢。風。の。称。あり。辰。日。雨師。者。龍。也。と。何。也。此。神。を

雨師。と云。も。漢。風。の。称。あり。辰。日。雨師。者。龍。也。と。何。也。此。神。を

本。紀。白。不。聞。人。芭。之。深。山。吉。野。丹。生。川。上。立。我。宮。柱。以。敬

祀。者。為。天。下。降。甘。雨。止。霖。雨。者。依。神。宣。造。件。社。云。と。何。る

多。併。せ。考。べ。し。注。式。の。或。説。小。龍。神。と云。る。ハ。正。説。あり。餘

を。非。は。て。仁。明。天。皇。紀。承。和。七。年。十。月。己。酉。奉。授。正。五。位。下

丹生川上雨師神。正五位上。同八年九月戊戌。從四位下。同

十年九月戊戌。從四位上。ま。と。文。德。天。皇。紀。嘉。祥。三。年。七。月

丙戌。正四位下。清和天皇紀。貞觀元年正月廿七日。從三位。

陽成天皇紀。元慶元年六月廿三日。正三位。さて。此。社。を。註

式。小。天。武。天。皇。白。鳳。四。年。御。垂。跡。當。社。為。大。和。之。別。社。事。見

延喜格。と云。也。○。此。と。大。和。神。社。記。小。も。見。と。り。引。て。考。は

了。止。雨。の。奉。幣。使。お。せ。立。ら。れ。ら。る。頃。後。醍。醐。天。皇。御。製。お

此。里。を。丹。生。此。川。上。右。と。近。し。祈。ら。む。は。ま。よ。五。月。雨。の。空

は。と。相。摸。固。大。住。郡。阿。夫。利。神。社。も。此。神。あり。は。し。今。謂。也

去。れ。あり。地。の。者。を。雨。降。山。と云。ふ。額。小。も。加。く。有。り。或。人

の。説。小。元。八。大。龍。王。と。稱。へ。る。を。其。社。を。別。當。八。大。坊。の。門

前。あり。高。処。小。移。して。額。小。大。山。地。主。と。記。し。何。り。と云。り

此。小。依。て。按。ふ。小。此。神。を。山。上。小。坐。お。さ。る。を。謂。也。石

等。字。祀。る。時。小。八。太。坊。の。門。前。小。移。せ。る。お。ら。む。と。八。大

龍。王。北。に。例。の。僧。と。も。此。号。切。る。お。ら。む。と。八。大。龍。王。と云

を。思。へ。ば。龍。神。あり。と。決。心。雨。降。山。と。云。や。が。て。阿。夫。利

の。在。字。あり。但。も。八。大。龍。王。と云。号。を。お。ら。む。も。い。や。古

死事とい見えとゆ。其在鎌倉右大臣殿の哥ふ時ふとゆ
妻ぐれむ民のあはきあり。八大龍王雨止免給へと詠を
あむ。此社を云ふ。然らむと思はる。れはあり。まは八大坊
と云ふ。此号より扱けさる。ふぞ有べき。猶この社此事ふ
付て。僧徒のかき乱せ。依事いと多る。を今
委しく辨へむ。煩を。れむ。此ふ云を。今
清和天皇紀。貞觀十二年八月。授伊豫国正四位下龍神。正
四位上。とも。何。此社今何処。ふ在。まは。大和。国。宇陀。郡。ふ。
室生龍穴神社。あ。依。も。此神。ある。貞觀九年八月。大和。国。
從五位下。櫻生龍穴神。正五位下。と。何。記。ふ。室生山。龍穴。
事。彼。山。有。三。龍。穴。云。龍。穴。之。底。入。十五。丈。有。五。丈。池。左。右。
有。穴。左。穴。最。方。也。此。内。有。石。戸。廣。三。尺。厚。二。寸。以。為。戸。扉。云。
云。此。内。入。七。尺。大。岩。有。之。從。地。一。尺。二。寸。上。有。最。方。穴。廣。一。
尺。八。寸。高。一。丈。五。寸。云。と。云。り。今。室。生。山。麓。に。何。ゆ。と。書。
ども。ふ。云。ず。り。○。上。件。三。柱。の。中。ふ。山。神。に。成。坐。る。ふ。就。て。考。る。ふ。

火神の御體也。まきもはと天上ふ上越て山とあり。大山
津見神ハ。其ふ因て生坐ると知られとゆ。其山を天之香
山とゆ。迦具土神也。御體の化まる山と依故。香山とは
云れ依る。岩屋戸。殺。彼。山。と。ゆ。招。禱。奉。の。品。を。取。れ。
ふ。云。る。を。け。て。山。の。始。は。火。神。に。御。體。の。化。ま。る。謂。ふ。因。
見るべし。ける。諸。高。山。の。頂。を。ゆ。火。に。燃。る。あ。ら。む。外。国。人。に。説。ふ。高。き。
有。る。故。ぞ。あ。ど。事。も。あ。け。云。れ。と。其。や。ぐ。て。火。と。土。
と。和。合。ふ。開。し。成。出。る。物。の。一。種。を。ま。む。此。の。謂。ふ。依。る。あ。
る。と。論。ふ。○。上。件。文。の。趣。ふ。て。は。大。山。津。見。神。ハ。雷。神。と。ゆ。後。
ふ。御。名。の。出。る。を。以。て。後。ま。て。次。ふ。成。坐。る。と。聞。ゆ。ま。
ども。此。三。柱。の。成。坐。る。は。み。あ。同。時。よ。て。其。中。ふ。山。神。ハ。

中段小成坐るふ依るし。けるは其御體の香山と爲れる
よとは論ひれく。文此趣ふても。御名こそ次小出給子ま。
此神を中カ上首と坐はしむ。と思ハはく。狀ミ見ゆる
字や。斯カて雷神カ靈神をもふ。山ミ住む神あるも。此謂ふ因
よとあるばく。はと靈神の龍カ此類乃祖カふて。其を統領と
はふ事ハ更ふも云を。雷神を謂ゆる雷獸の祖神也。
其字統領スゆ給ひ。雷獸と云を漢語を依を。此方ミてハ。処
ヅチとも云あり。又サ、山津見神は鹿カの祖神カ坐して。
クカを云ふ処も何也。其を統領ス給ふよと。思ふ由あり。抑カか。依事をし牙
小言ふをば。人を然カこそ言過カとるよと。思ふれれど。其

れ不いまど。漢意の除カらぬも此ぞ。龍カの類カ祖カあるこ
とハ。上カ引る。景行天皇。卷カ記せる故事カふて。更カ論れ
きを彼雷獸カをしも。予いと弱く。て秋田カ居る。ゆし。布ど
ふ親しく見ある。の大カ狸カ元カ年カあり。し。毛カを彼獸カとゆ。長
くや。黒カき物あり。往カし。寛政カ元カ年カあり。し。五月カ頃カい
あカく。夕カ立カして。神鳴りカを。き。神降カあて。間カも。ふ。晴カと
喰カひて。居カる。予カ從カ弟カある者カの。庭カ此カ築山カの。木カと。ゆ。小カ蟻カを
よと。手カおと。小カ持カて。事カも。ふ。く。打カ殺カし。ま。り。然カる。子カ從カ弟カ
が。家カを。予カが。家カと。た。二十カ町カ許カも。隔カま。く。ば。知カら。て。有カし。を。
二日カむ。の。也カ有カて。其カ事カを。知カて。往カて。見カる。ふ。彼カ獸カを。バ。若
き人カく。ちカ集カひて。早カく。喰カ竟カ多カ。皮カと。頭カを。残カし。置カ
ぬ。さ。て。味カひ。ハ。麻カ美カ狸カと。云カ物カの。如カく。ふ。て。いと。美カく。也カし。
ふ。ど。云カ了カ。甚カ不カい。ふ。く。形カむ。有カる。の。如カく。ふ。て。いと。美カく。也カし。
地内カ小降居カと。也カし。家カ此カを。投カ網カて。ふ。物カを。打カう。け。ま。生カ捕
ま。あ。さ。ゆ。し。う。げ。其カ時カ木カの。ま。よ。く。見カれ。る。あ。り。さ。て。其カを
驚カの。竹屋カ入カま。て。養カお。き。け。依カり。常カハ。狸カ外カど。を。畜カと。ら
む。や。う。よ。て。さ。し。も。猛カく。ハ。あ。ら。ぬ。獸カある。を。空カの。陰カま。る
とき。を。勢カ気カは。ら。ふ。常カと。を。別カふ。して。竹屋カ字カ破カ也カも。也カは

き状ふる故ふ其屋の上ふ石おど置て破らせじと構牙
おるふ一日太じく夕立してかき陰れる時ふ遂ふ竹屋
を打破りて雲ふ飛入り去るが即鳴るとよみおるハ其
の何ら然りさて此獸常在山ふ住て其山辺人の言をき
くふ此の多ある処ハ神の鳴去と繁うる故ふ雷獸獵と
云ことを為れむ神ハ鳴るを少しとぞ此等を以て按
ふふ彼ハ雷神の御末了て此う成坐る雷神を其御祖
坐して彼獸を掌給ふ状ふ思ひあさゆふ非也や彼海
神の鱈此祖子坐坐ふを思ふる猶下ふハ俣大蛇の
尸此雷とおれる処合せ考ふ法ハ第七十段傳を見と
けて彼雷獸と云獸はしも雲ふ乘て鳴はさ多くれど信
ふ神おれども人ふ制せらるるばの正常ハ卑死物ある
は甚く奇異死ふ就てれ本思ふふ雷神の用ひ給ふ子依
てぞ彼を神お依所爲の何ゆて實ハ彼が神お依ふは
非げゆれ也其ハ鳴神此をくはしふ処を撰バ交神
降して石を碎木を拆おどを心おくて為

以事のおと凡人を思ひ居れど世の多死人此為不善
らぬ物を別了え正て撃ひしぎまど神功皇后の迹驚岡
を掘し灸給ふ時ふ大石の塞りて穿得ざりしを大后此
神お祈り給ひしうば霹靂して其磐を裂きて水を通
ふたる類の事此多うるおどこれら人ふ煮て喰ハる
給ふが故うかくさ依を凡人も神お誘をを幽冥ふ
功をれ也ぞりし
入也やのて其神お使は依く時を常ふ變也靈異ある
事残も爲は由也也ては慥ある事実を聞持但し此を人
小限らぬ凡ての鳥獸も必然な法し殊小此雷獸と云ふ
近き物けて神降お給ふ事實をあらは按ふ依ふ其善
字也
ら然物を撃給ふはさ依事ある残時と志ては然も何ら
然物の撃依く事もあるハ凡人此少き智もて加ふかく

小測知らる。際ふ何ら祓と。是ぞ神の功也。弘く大なる
所よて。然る細く祀撰びなく。御稜威を震ひ給ふはしふ。
稀ふ然依事此有て。物ふはま人ふまれ。謂ゆる運何志く。
偶その御稜威ふ觸る。ぞ有れ依。其を天日の照まはし
りて物も生成立
おまはく其照日傷たれて死る物も有ると同じ然れ
理おれぬ是ぞ神の功也大なる所と云ふあり然れ
ば。何ぞと善人と云牙ども。多ま。然依まをふ逢むも。
測也がふたわざふれぬ。一向ふその御稜威の畏死を畏
はゆて在より外ハ形支事ふれむ。斯て彼甚く怒て死
し人の神魂とあてふは。此の謂ふ依て。雷神と共ふ稜威
速ぶる功を爲しふて。其を彼獸を用ひた。勢を顯はる

ぞ有はき。然らばは。彼荒ふる事の有るも
非に熟くは。事実を察て曉るべしはて雷神の
世間ふ功を爲し給ふ跡を。おら。考依ふ人の愚畏む
は然るものふて。禽獸蟲の類も恐れ惑ひ。ま。世ふ惡死
病を流行する妖鬼も。甚く怖は。げふて。其病此や。ま
るれど。いをも畏く奇異なま。其ハ彼。疱瘡などを煩ひ
直し石痘と云ふありて。事故なくいどつ
おどハは。見おる事れまハ。如此を云ぞ。圀生坐る大
神の御怒也。火神の御怒とふ因て。成坐る神の御稜威也。
いのふ太。祀物あらば。此神の御稜威を。かく世よ及
施らし給ふ故ふま。百足の比禮。蛇。此比禮をも。用ふ依
おと無き世とは有ふれ。お此比禮ともの事ハ。第
八十三段の傳ふ注べし。然る御

徳をば思ひ通さて。あふ荒ぶる神はと嫌ひ思ふぞ。
凡人の習比あてり。依道志さむ人を此理をよく思ひ
き事とぞ思雷鳴の時は必其御祭を為べ
ひ奉ら依事。○一傳云此古事記採て記せ。正鹿山津
見神。名義師を口訣ふ眞坂を也。と云依事。従られおまど。
其義ふを非じとぞ思ふ。其由下。○於オド勝山津見神。師云。
於オド勝ハ下處の意。今も下る處を於理オドと云ふ也。ちて
かくは末子活ハクくラリル。は省く例多し。○奥山津見神。
奥山を聞えとる儘也。○陰ハ袁婆世ヲバセと訓師を富。
れおまど。火神を男神坐。○闇山津見神。師云。闇とは谷
也。此詞いふぞやおち也。○闇山津見神。師云。闇とは谷
の事也。○志藝山津見神。師云。志藝山ハ繁山ある也。

○羽山津見神。師云。羽山を端山の意と云説とろし。又葉
山ふても有ハク。青葉山を云まとも也。○原山津見神。
師云。原山を字の如けむ。○戸山津見神。師云。戸山を奥山
小對ひて。外山此意ある也。と有也。御紀の亦一書ハ
祇あれ也。此傳委也。似とれども。雷神と靈神の生坐
ともあり。依事此を也。却りて粗コき傳あり也。按オキふ。かく種タく此
山津見の名ある也。大山祇神の御靈の次ハクふ分也
て。其處ハクを持分坐也。かハクる傳也。出來しふぞ有べ
也。さて此傳ふ。まお始。小生坐る。正鹿山津見神と云名の
正鹿也。正字もて。此を決ワケく。大山祇神は御靈ふ因て成れ

依鹿神あるはく所思と云。高龍神を龍神大雷神を雷獸
 思ひ合其を信友も既く加具土の香山に通ひ正鹿の眞
 名鹿も通ひて聞ゆるは由ありげありと云ふしハ然る
 言よて彼此思ひ合はるき事ども此多う依を其を下ふ
 次く言を見て知はし。第四十五段眞名鹿の処まよ第百
 十三段天之迦具神此処を合せ考
 ふべ

故其大山積神。亦云大山。亦名
 大水上神。亦云大水。御祖命。亦
カレソノオホヤマツミノカミ
 マタマラスオホヤマ
 ツミノオヤノミコト
 マタノ三十八
 オホミナカミノカミ
 マタマラスオホミツノカミトマタマラス
 オホミツノカミトマタマラス
 オヤノミコト
 マタノ

三十八ヤマイカヅチノカミ。コノカミノミコトマラスタカミナカミノ
 名山雷神。此神生子。謂高水上
 神。亦云高。此大山津見神。與野
 水神。
カミトマタマラスタカ
 ミツノカミト
 コノオホヤマツミノカミ
 ツノカミト
 マタマラス
 推神二柱。因山野持別而生坐
ツチノカミフタバレラヨリテヤマニモチワケテナレマセル
 神出名。天出狹土神。次罔出狹
カミノミナハアメノサツチノカミツギニクニノサ
 ツチノカミツギニアメノサギリノカミツギニクニノサ
 土神。次天出狹霧神。次罔出狹

霧神次天出閻戶神次因出閻

戸神次大戸惑子神次大戸惑

女神凡八神矣

大山罪御祖命御祖之種くの山祇神也御祖と云意ある
上御祖命此ら大山祇神の示名あると此證を此御名
ども延曆儀式帳小見えて式小度會郡大水神社とある

社を大水神社一処稱大山罪御祖命形無倭姫内親王定
依これきよきり依るふて大水神と云ひ大水神を云々大
山祇神あると知れと也此神を御祖命と云ことちて
此神を大水上也稱はるとはま於四時祭式廣瀬大忌祭
條小是日御縣六座山口十四座合祭と見えこの山口
申申はる前段小奉さる山口祝詞式小廣瀬大忌祭祝詞の
次よこれ十四座の山口神社白は祝詞何とて其文了
倭因能六御縣乃山口爾坐皇神等前爾母前件小引とる
宮材を採るよ於きて祭る詞あり皇御孫命能宇豆乃幣
乎云るを今省きて引きつ如此奉者皇神等乃敷

坐須山マヌ乃自口ノチヨリ狹久那多利爾ナダリニクダ下賜水乎クダシタラフ考云久那の逆約
垂を延て佐久那陀理と云ゆ大祓詞了高山之末短山之
未与利佐久那太理尔落多岐都速川之瀬坐云くと云る
小同ウマキミツトウケテ令の大意祭の義解み欲令山谷水变成
甘水登受而アホシタラフ乃公民乃取作禮留奥都御歳乎惡風荒水爾
意ありアホシタラフ天下乃公民乃取作禮留奥都御歳乎惡風荒水爾
不相賜汝命乃成幸波閉賜者初穂者云くアホシタラフあく奉物の
省ヨコヤマ如横山打積置氏奉牟登云くアホシタラフ此小御前子集ひて
を引ヨコヤマ諸參出來氏皇神前爾宇事物頸根築拔氏朝日
乃豐榮登爾稱辭竟奉久止宣と有を見れむ山神を山を
知看して其山之口と也佐久那太理爾落下し給ふ水
を田小受て穀物を取作る故ふ山を水の水上と云意を

以て其功を稱了て大水オホミナカミ上神カミまと大水神とハ申ふゆけ
也はと大水上御祖命とも申は事を大山祇御祖命と申
を同く殊了稱了とる御名あるはし神名式小伊勢国度
會郡大水神社此社を今宇治郷畑村と云よ在と帳考小
何れど一本小大水の二字あり其正き本あり田上大水
此考へ垂仁天皇卷二十五年の処小注べし
神社此社を今継橋郷宮崎と云處了在と帳考小云也下
小由ある事石見国邇摩郡水上神社此社のおとを第七
と所思也十四段大山咋神の
処小委く讚岐国三野郡大水上神社此社を清和天皇紀
云べし
貞觀七年十月九日授正五位下同十七年五月二十七日
授大水上天神正五位上と見えとゆいま神田の別れ村
羽方村と云ふ処小

けりて此神の事蹟を。世記に倭姫命大御神の宮地を求
て。度會郡小至坐る時の事を記せる處に高水神。上てふ
けるを大水を大水。參相支女。固名何問給白久。岳高田
と稱す同りるを。淡坂手固止白天。田上御田進支其處仁坂手社定給支と
あ也。此を甚く時代違へるふ似とれども。此宮地求の時
は。某く小鎮坐る神等のみを現人神を現はまきて御
田進也。はと御饗れど獻られしうば。此神も現れて御田
進らるる也。此等の事委く垂仁かきて此功よ也。
坂手社を祝定給ひらむかし。儀式に倭姫内親王定けり
其社は式小度會郡坂手固生神社とある是なるは。此社

は田辺村荒木田氏社の北方の小塩崎と云池の辺に
也。坂手ハ此辺の古名ある由いひ傳ふ也。帳考云り
勿布大山津見神乃御子也。いをも多加也。其下尔次
山野。山野を師説ふ。常小を怒夜麻と訓。夜麻怒と訓べし。
下の河海の也。例此如し。はて因とは山神ハ山小倚坐し。野神
は野小因坐てれり。○特別而生坐とは。此神はち凡の
上を云るふて。二柱神。山と野と小別く小生み坐ると小
は非也。その特別て坐る二柱の産靈ハ御間小生坐る也
此事也。ま御合ませる由も。○天之狹土神。固之狹
土神。本書に訓土云豆知と何れ。名義師説小。狹を志那の
切ま也。ある言ふて。其志那ハ級了て。坂路の古也。其

ち。此は彼の謂ふ依て生坐し。彼を此謂ふ依て生坐ると。其生坐る謂こそ。各々異ふれども。凡て二柱神の国土を成し堅免て。青人草を愛み給をむの大御心よ。生成し給する亦依故。其神とちれ。今れ現ふ。国土青人草ふ幸ひ給ふ。御功德の蹟を免て。於らくよ察もて行なば。はと此御謂ふ。少うも違ふこと無し。其を近く譬をと。て言は。稻種を田ふ殖るを。天於日れ蒸生は。彼火神の埴山毘賣神ふ御合坐して。稚産靈神の生坐ると。全く同理。て。火神土神水神の御靈ふ因る亦。斯て山山此口よ。佐久那太理ふ落來る水を。甘水と受て。風そ

と地於く登らにる事は。山神風神此御靈ふと依を。火の土を照入ることの烈々まを。惡虫も多く生出て。稻も枯れむとにる哉。其烈く照入る火氣ふ蒸さまて。山ふ含免依水の。天此狭霧と發升て。雨と降るは。古き山神土神。水神此幸子給ふ所あり。但し此を密に分て云。霧ふあちふて。其を降らし分り給ふ。神此段ふ成坐る神。水分神久比奢母智神の掌給多御事あり。けて如此火氣と水氣と互ふ争ふは。しふ。雷神のたせ。鳴出で。霧神の水雨をけ。降し給ひ。万葉ふ我。崗の霧。雪の摧けし。そ。人妻らよ。たびえ。魂ぎ依。加。畏免。ば。況て虫。あ。とは。深く穴。了。隠れ死も。免。て。天霧ひ

雨の過かまば。風の吹出て吹撥キひ。風の烈しけまば。火氣の盛りふふてて。災事マガコトも起らむといるを。其火氣ヒキふ催イされて雲起りて。雨レ降來て風を和なぬ。如此カク神ノの御所業ミヤノ也。互ニ相助け相制ウチて。罔土青人草を幸イひ給ふ。其元の理をおし考ふれむ。天神祖命アマツカミミコノの。此罔土修固成ツクせと。御言依ミコトし給ふ。は大詔命を。二柱神ニツツ比重ヒヒみし給ふ。大御心オホミコふ。生成ウツ給へる。神ノとちニ坐マひて故ユ也。然シるを外ウチ罔人ミコトども。物理ウツを究ミ此人コノあらば祓ハむ。其元の謂イハをバ得エ知ル。於レて。火ヒ土ツをシ。蒸シふ。神ノ罔ミ也。雨レ降リて。火ヒと水ミヅと争マふ。はし。雷カミを鳴ナゆ。あらど。極キ也。もも多ク於テて。其象シマを器ツに造ツめ。あらど。して。自然シ然ル。物モノを。極キ也。み思シひて。如此カク神ノとちニの。掌テ分クけ。坐マひて御德ミコトと知ル。らる。居イる。人ヒトは。譬ヒへば。人ヒトは。閻ヤミ處ト也。磔シを打ウち出デ。去リを。此方コノ居イる。人ヒトは。然シる。あらど。を。知ル。らる。で。磔シの。自ミ飛ト來リ。る。を。思シひ。居イる。人ヒトは。如シ。

く。いと浅アサましく。あらそ。祈イりて。雨降リ。祈イて。晴ハるらず。ても。神ノの御心ミコ子コ因ユること。あらむ。を。熟シく。思シひて。穴アナうしこ。古コ学ガク此徒コノ也。免メ外ウチ国クニの。説イハふ。れ。惑マひ。そ。祓ハむ。さしひ。於レる。や。戎人ヤマト去リら。心ココロあらむ。を。光ヒ神ノ鳴ナり。風カゼ烈シき。時トキあらど。は。甚シく。畏オソるも有アる。○上ウヘ件ケン云イハる。神ノあらち。此コノ。生ナ坐マゆ。元ノの。謂イハむ。風カゼ神ノを。除ハる。死シて。は。凡ソトて。火ヒ神ノの。由ユ縁カふ。因ユて。生ナ坐マるふ就スて。但シ風カゼ神ノ生ナ坐マして。ちし。次ツギふ。火ヒ神ノの。生ナ坐マるふ。あらど。現アる。見ミる。處トコロの。事コト実マコトと。を。合アせて。考カふる。も。此コノ。も。幽カき。契ケ何ニ也ナリ。げ。あらゆ。こと。を。上ウヘに。云イハる。れ。不レ按オふる。火ヒは。万マン物モノを。害ガイひ。込コして。甚シく。世ヨに。災事マガコトを。れ。去リ。畏オソき。物モノあらむ。字ジ。あらど。有アる。と。有アる。ゆ。万マン物モノを。幸イひ。生ナし。万マン事ジ。發ハち。初ハジメむ。ゆ。物モノあらむ。あらど。上ウヘあらむ。傳ツタへ。も。を。熟シ味アジふ。ば。く。此コノ。後ノチ。伊イ邪セ那ナ岐キ命ノ。豫母都罔ヨモツミ。往イ坐マして。其コノ穢ケガレふ。觸フれ。給イひ。其コノを。御ミ滌ソぎ。まして。多シく。此コノ。神ノあらち。の。生ナ坐マゆ。あら。

云もて行はば。元々火神を生坐る事と正起れる事ハ
依え。いとも靈妙ある事ハらば。お本次くふ云ふ
字見て曉る儘し。

於是伊邪那岐命欲相見其妹

伊邪那美命而追往豫母都罔

矣故其伊邪那美命自殿騰戸

出向出時伊邪那岐命語詔出

愛出吾那邇妹命悲思汝出故

來吾與汝所作出罔未作竟故

可還詔矣爾伊邪那美命答白

悔哉不速來而吾已爲豫母都

戸喫。雖然愛出吾那勢命入來

マセルコトカレコケレバナムヲカヘリレバラクトヨモツ
坐出事恐故欲還且與豫母都

カミ アゲツラハムウカラヤ ナミタマヒソトアヲマヲレテカヘリイリニス
神相論族也莫視我白而還入

ソノトノヌチニホドイトヒサシクテマチカネタマヒキカレ
其殿内出間甚久而難待矣故

サセルヒダリノミミヅラニユツツマダレノ
刺左出御美豆良湯津杺櫛出

ヲバレラヒトツトリカキテトモレテヒトツボイリミマス
男柱一箇取闕而燭一火入見

トキニウジタカレトトロハギテ
出時宇士多加禮斗呂呂岐而

ヤツノイカヅチソヒヲリキ
八雷公副居矣

オホレアヒミク
欲相見相を師云逢の意小見ばし。○豫母都國ハ上小下

津國とある國此おとよて。即夜見國を云ふ。然るを豫母

豫母都醜女豫母都平坂外ど云。名義ハ字の如く夜見お

正。其を此國ハ大地の根底お成して。此事ハ第三段。國土

お隔られて。天此光を受ざる國ある故。暗う正し。のば。

如此は云お正。下文。燭一火と。○追往師云往を伊傳麻

志と訓ばし。凡て行給ふことを古言小伊傳坐と云也。故
行幸をも古くは伊傳麻志と云也。此語本々出る意小云
ゑる小母有るれど。必は死でもあぐ。行賜ふも。來賜と
云うも云也。今の俗語も御出あさ依と云を行こせも
も來こと小母用ふる也同じ心ば有る。
○殿騰戸。おは登能く阿宜度と訓べし。伊邪那美大神の
住給ふ御屋の戸也。騰戸也云也。下と上を引上依戸
を云れる也。今も有る也。師説ふ。崇神卷歌小。彌和
能等能度と何也。三輪之殿戸あり。此小依て登能度と訓ばしと
云きされ也。けては騰字無用あり。但し眞福寺本小を騰
と何也。此よりよればク
三ドれど訓ばき○汝字。師云。前小を那と訓ばし。此は
小也。猶考ふべし。

美麻斯と訓む也。元正紀宣命小。美麻斯乃父正坐天皇
乃。美麻斯爾賜志天下之業止云也。美麻斯親王乃齡乃弱
爾云也。吾子美麻斯爾云也。此美麻斯を聖武天皇を指
て元正天皇の詔へるあり。光
仁紀小。美麻之大臣。光仁天皇の詔へる也。あど有る
尔依れ也。けて言義ハ御坐り。今も尊びては御所御前
也云也。まも若くを御身し小て○所作之圀を所生之
圀と云むが如し。其は生を成とも云ひ。成を作るとも云
ず也。○未作竟故とは。師言ふ。下小大名牟遲與少毘
古那。二柱神相竝而作堅此圀。あつふことある。是今妹妹
神の未作竟とまをぬ所ある故也。相照して見ばしと

何に。はて妹妹二柱神の。因作給する事實ハ。物不見えざ
れども。尾張風土記。因造坐大神と見え。出雲風土記。小
神門郡古志郷の處。伊弉那美命之時。以日淵河築造池
也。あるを思ふは。只生給する此みあら。作堅も爲給
す。亦亦。其池を造る。おと。潮ま。水ふま。彼此
の本とり。ふて。はと。早魅の。○可還詔矣。師云。麻世の世を
延て。佐泥と云は。古言此常の格あり。○悔哉不速來而師
云。哉。字書紀。小伽夜。卷。神武。也。も。柯佞。卷。顯宗。也。も。注せれども。
小不加母と云ぞ常ある。加那と云こと。奈良。はて此也。
既小豫母都戸喫し給す。亦亦。と。戎。悔給す。亦御言亦。○

豫母都戸喫。師説。小問とは。即竈の。おとあり。戸。字。書。ハ。
竈を本。小て。民戸を。も。然云。故あり。漢因。小て。民家を。戸と
家。字。問。と云。小。此字。を用。り。さ。て。竈を。以。て。民家を。よ
ぶ。こ。を。今。世。の。言。小。も。幾。竈。と云。ま。と。竈。が。絶。る。お。と。も。云
と。云。ふ。も。此。意。あり。は。て。豫母都戸喫とは。夜見。因の。竈。小
て。煮。炊。と。る。物。を。食。を。云。也。是。小。む。火。を。忌。清。む。る。事。此。本
小。也。ハ。亦。火。何。也。曰。火。雖。是。淨。因。物。而。穢。故。不。食。炊。爨。之。物
而。已。と。何。る。水。火。ハ。天。生。の。物。お。れ。バ。穢。あ。し。と。云。也。安。小
理。を。の。み。思。ふ。漢。意。あり。も。し。物。小。因。て。穢。と。せ。ば。夜。見
の。物。を。炊。爨。の。具。小。限。ら。び。惣。て。穢。れ。と。る。法。き。を。取。分。て
竈。字。し。も。云。也。と。其。火。小。穢。の。有。る。故。不。ら。る。也。後。は。男
神。此。御。身。小。著。る。御。衣。服。お。ど。穢。し。と。て。投。棄。と。る。ふ。を。夜
見。の。凡。て。此。穢。あり。然。る。ふ。今。此。小。他。の。物。を。此。ま。ハ
亦。し。て。唯。戸。喫。字。し。も。詔。ふ。也。火。の。穢。此。重。き。故。亦。め。さ。て
火。小。淨。と。穢。と。が。何。る。こ。と。は。如。何。あ。る。所。以。と。も。測。正。知

おきり何らぬを其理おしと思はるハ神の御言を信交
ふて安ふ己グ心多信むものあり今世に神事此時ま
と神の坐地おどふこそ火を忌こと有免れとおぼて世
間ふえ然るにげもせぬえ火に穢を云ハ愚れにおぼ
さかしらる漢意の弘これるおに今云上ふ云當如
御祖神の生給へる処去てふ二種おて其やめて清きと
穢きと異なる状よ見ゆ依上何れかし去方此禍を火の
を其を撰まて有べり交何れかし去方此禍を火の
穢依くから起るぞかし神道ふ志さむ人を由なき漢意
を捨ててよく此を思ふば死おぞかまバ民を撫て世
戎治むるを先天下の火を忌清めて神の御心を取奉る
べきものぞけて今此ふ如此申し給ふを族離なる死御
心は坐はしてはと此因土ふ還坐まなくは思ふし食
ものから此豫母都戸喫の穢よ因りて還坐去こと不能

依よしれ也此御言をよく味ひて何れをし去火の穢を
恥ぢざりおれ思ひおしそと有也此を実ふ然る説あり
猶次くよ云を見
けて此神を去り夜見因を忌惡み給ふ故に彼因ふ屬る
事物をば返遣てむ失ひてむと稜威速ひ給ふ御靈の盛
れ依よ依て石屋戸段ふ方おの物を此神の御體に化れ
る香山より取れるお也其を彼度ハ神事ハ夜見因よ也
起れる禍を返遣也失はむとけるの事お也七かむれぬ
委くを彼処カレドモ○雖然ハ豫母都戸喫して還坐のハ死御身
ふ云登し○
上とおに坐ぬ然れども云むが如し本を然字のみお
正しを師此訓よ
依りて雖字○恐故を俗ハ難有勿體おけまハおど云意
を加と也

ば予ふて。吾は豫母都戸喫して。歸かへるに身みれのらも。汝な妖命まじの御み自身みづか歸かへ坐ませとて。入來いり坐まる事ことの恐おそけまば。とれ也なり。○欲た還かへ師し云い。此こ衰おとろてふ助辭すけご也なり。古歌ふるうたをまく知しれらむ人ひと也なり。○自みづか味あじひ知し。と云いまる依よるが如ごとし。○且かつ字じは斯婆しは良ら久くと訓しるし。其そのを豫母都神よもつじんと相論あひまふ間まを姑しやうく待まちて。我われを視み給たまふれとあり。下文くだふ甚久く而して難がた待まち矣なり。○豫母都神よもつじんを如何いかある神かみと云いまる。御名みかの無なれど。知しはま由よしなるまど。既すでく此こ圀うの成なり初はじし時とき。圀う之の底そこ立た神かみ。豐斟ゆき淳じゆん神かみの成なり坐ましけり。其その初はじを詳かりし。傳つたへりて下くだふ伊邪那美神いせんなみかみを豫母都大神よもつおほかみと申まをはすよし見みえとれ

ば。此神このかみの大神おほかみと爲なす給たまはざすし。不などを。此こ見みえある豫母都神よもつじんぞ。大神おほかみを坐まはしむ故此神このかみと相論あひまハむとは宣のたまへる依よるが如ごとし。○相論あひま師し云い。阿宜あぎハ言舉ことばあの如ごとし。都良つら布ふハ引ひ扱あらふ。挂か扱あらふれどの類たぐひ也なり。其その貌かたちを云い辭ことばあり。今云いまい。相字あひまハけて此也なり。上圀うわうお歸かへ坐まむと依よるが如ごとし。相議あひま、あまふを云い依よるが如ごとし。○莫視な吾われハ夜見よみ圀うの實まこと也なり。御有みあり狀かたち此見こ苦くるさを。男神おほかみお見みせ給たまはしとて也なり。其そのハ下文くだふ宇呂岐而うりぎとあり。然しか在あるが出迎いでま坐ま依よるが如ごとし。夜見よみの實まこと也なり。御有みあり貌かたちを御覽みして。男神おほかみ此始こ也なり。○殿内どのうちハ師し云い。登能のぼり奴知やつちと訓しるが如ごとし。て畏おそまるを思おもへし。

神功皇后紀の哥よ。腹内を波羅濃知と詠。○間ハ。師云。阿
比。万葉小。囀内を久奴知と訓る例あり。○間ハ。師云。阿
陀と云むも悪。富栲と訓は。然訓る例。万葉十一。不有ゆ。
うら祓ど。不。富栲と訓は。然訓る例。万葉十一。不有ゆ。
○甚久而甚。師云。伊登と万葉小訓。言ふ。甚字とく
叶へり。最字。也云れき。はて此。上。且云く。有依と。挂
合。語あり。○難待矣。師言。待。祓。云。語。万葉小多し。
加禰。小。多。く。不。得。と。書。凡。て。迦。泥。と。云。み。此。不。得。
字。の。意。不。得。待。祓。待。得。ざ
る。を。云。ふ。俗。云。と。を。難。字。も。意。は。通。牙。也。と。云。よ。通。牙。れ
い。け。う。違。ひ。あり。難。字。も。意。は。通。牙。也。と。云。よ。通。牙。れ
ども。此。の。難。を。直。ふ。也。有。り。は。て。此。を。前。ふ。且。也。詔。牙。る。不
あ。う。訓。て。を。惡。し。合。せ。て。は。甚。久。志。死。不。待。何。牙。給。ハ。ざ。也。し。れ。也。○御。美。豆
良。此。を。御。紀。小。髻。と。何。也。正。字。也。師。云。美。豆。良。は。上。代。小。

男此御装よて。髪を左右分て。結縮するものあり。下小
天照大御神の解御髪而纏御髻とるふ。と何るも。息長足
比賣命此。檀日浦ふして。御髪を解して。海入洗ふ。ひ
て占あるふ。御髪自分とる。或即その分をさる。ま。ふ
結て。御髻と爲る。未ふ事何依も。假小男貌と爲給ふ。れ。也。
は。と。崇。峻。天。皇。卷。ふ。古。俗。年。少。兒。年。十。五。六。間。束。髪。於。額。十
七。八。間。分。爲。角。子。今。亦。然。之。と。何。依。此。角。子。即。美。豆。良。也。ゆ。
十七八間と何る。也。後。の。事。ある。べし。いと。上。代。ハ。凡
て。男。を。然。せ。し。よ。と。右。云。云。如。し。○角。子。を。何。げ。ま。死。と
訓。る。ハ。後。の。称。あり。万。葉。七。小。角。髪。と。何。也。左。右。小。有。依。也。
即。み。於。ら。と。訓。を。し。万。葉。七。小。角。髪。と。何。也。左。右。小。有。依。也。
角。の。如。く。ある。故。ふ。か。依。稱。を。有。あり。後。世。ハ。鬢。頰。と。云
ふ。也。此。美。豆。良。字。

訛れる言あり。江次第ふ幼
主之時垂鬢頰とも有り。扱う此大御神の御装の所を
以て見まバ。美豆良ふも珠を飾りしあり。万葉二十ふ阿
母とじも五
もがもやいあきて美豆
良の中ふあ牙まうまくも。○湯津爪櫛を。湯津を。五百箇
此約れるれ也。第十五段ふ師説を
引て注せるが如し。爪は。師云借字ふて。加
都麻の上を畧けるふ也。加都麻は堅津間ふて。多都を切
むれハ都
櫛此齒の志ぐくて。間の堅くせまれる哉云也。元間勝
間小船乃勝間も。此意れりとあ也。按ふふ爪を。都麻理て
ふ言の理此省也。さるふて。櫛の齒此志げくて。間の迫れ
依を云ある法し。又もしくた爪を正字ふて。齒
の状爪ふ似とれバ如此云。櫛ハ。師云。
本串と同名れり。火を燭し賜ふを思牙バ。上代の櫛此齒

は。や、長加也し。のば。串と同類ぞかし。○男柱を。師云紀
ふ。雄柱を有り。あれをホトリ。バと訓るハ。辺齒此意ふて。
中古の称あるべし。二記共イ柱とあれ也。
古言を。然らじ。共ふ袁婆斯羅と訓る。字鏡ふ。幢柄。橋梁之左右
之柱乎止古柱と有り。大神宮年中行事。東男柱。西砌云
云。あれを御殿の高欄此男柱とて
字鏡ふ云。是ふ準ふまば。櫛も左右此端此大なる齒を。男
柱を云けむ。して此を取闕て。火燭あるひしを思牙ば。上
代の櫛齒ハ。や、長加也むむこと知ら依。○一火。あぐ火
せても有ぬ法きを。一火としも云る由は。次段ふ云法し。
今世人。夜忌燭。一火と有り也。○宇士多加禮斗呂岐而。御紀云。蛆沸膿
流而を書也。師云蛆を本草てふ書ふ。李時珍云。蛆蠅之子也。凡

意オモハイタリイナシ到伊那志許米伎キキタナキクニニケリト汚穢圉矣

詔而逃還出時ノリタマヒテニゲカヘリマストキニイザナミノミコトハヂ伊邪那美命恥

恨而ウラミテマラシタマハクナゾモズ白曰キカチギリレゴトラテセタマヒハヂ何不用要言而令恥

見吾耶ミアラニツルイマシステニミツアガマウララアレマタ汝已見我情ミムトイマシ我復見汝

情マウララマラシタマフトキニイザナギノミコトモハチタマヒキ白出時マウララマラシタマフトキニイザナギノミコトモハチタマヒキ伊邪那岐命亦慙焉

因將出返出時カレムトレイデカヘラタマフトキニズタダニモタカヘリタマハテウケ不直默歸而盟

出曰ヒタマハクウカラハシムジトマケウカラニノリタマヒテスナハチ族離不負於族詔出而乃

唾出時ツバキタマフトキニナリマセルカ三ノ三十八ハヤタマノヲノ成坐神出名速玉出男

神次カ三ツギニハラヒタマフトキニナリマセルカ三ノ三十八ヨモ掃出時成坐神出名豫母

都事ツコトトケノヲノカ三マタノ三十八マラスオホコトオシ解出男神亦名謂大事忍

ヲノカミトアハセテフタバシラマスイマモヨノヒトヨルイムトモスコトラ
男神凡二神矣。今世人夜忌燭

ヒトツビヲハコレソノコトノモトナリ
一火者。此其縁也。

見畏而亡。師云見て畏むあり。古事記ふ所く此詞あり。見驚見喜見感おど加志許牟は。たそゆる。古とあり。推古も有てみお古語ぞ。加志許牟は。たそゆる。古とあり。推古卷歌ふ。訶之胡彌氏とあり。字鏡ふ。悖を惶也。注し。加志古牟とも。於曾留とも有り。○伊那志許米伎汚穢因伊那ハ。辭否あぞ。同言ふて。此は惡み厭ふ御言あり。書紀ふ。不須也。也。字を添られ。心得。○志許米伎は。まぢ志許ハ。師説ふ。志許賣の志許と

一ツて醜あり。万葉ふ。鬼乃益ト雄鬼乃志許草志許霍公。鳥鬼之四忌手之許都於吉奈。訓る。非あり。こを醜字の偏を畧る。又醜女の意を得て鬼。れと云る。皆其物を惡とハ書ク。いぢまよまれ。志許あり。れと云る。皆其物を惡み罵て。志許とは云あり。米伎は。けと活く。辞あり。ひら。灸く。むし米く。けく。灸く。あま米く。あぞ。多又云。米久の活けるふて。此を直小夜見の。其貌を云。辭あり。書紀ふ。不須也。凶目汚穢。此云伊儼之居梅枳多儼枳とあり。又天忍穗耳等の天降まは。処。○到矣。は彼因ふ行給ひし事を歎息て。かく詔するれ。○逃還。逃てふ言。雄略天皇卷の大御歌ふ。爾宜能煩理斯とあり。○何は那

敘母と訓はし。痛く咎給へる御言れり。○不用要言而
は。知岐理斯言。袁伎加受氏と訓むる。用字を常の訓は
訓を非ちて其要はせし御言は。かの且與豫母都神相
論莫視吾と詔牙は是也。○令恥見吾耶ハ。恥を與るを
恥見に云は古語なり。ちて如此白し給ふは。彼汚穢き
御有状を男神の見給ハむと。戎恥給ひて。莫視給ひそ。
と禁あるへるを用給はて御覽る事。甚く恨怒坐依
御言也。前御産の処を御覽る時。多恨み坐る
は。著明く見えて。其を豫母都戸喫し給ひて。歸坐加と死
いと畏れあむ。御身あら。男神の入來坐るふ。さびぐふ歸坐むの御心

何ゆて。豫母都神と相論て。其道何らば。歸らむと。議し給
ふ間字。待何牙給て。恥見せ給牙。しうば。其慙歎ある
御心の餘ふ。加牙也。て御怒を發し給牙。るあり。穴かし也。
○情を麻宇良と訓はし。訓ハ非あり。此を女神の御會
處のことよて。言義ハ眞心あり。下。第百六。ふ。豐玉毘賣命
雖恨伺情事。とある情も同じ。此をも旧くコ、口と訓は
て此を。前。那佐那と訓はま。後の稱れる故。改。其
己。前。成文を撰。時。既。コ、口と訓る。非ある
事を悟りて。中。世。の。戲。籍。と。も。會。處。を。ナ。サ。ケ。ド。コ。口。と
云。る。こ。と。あ。る。を。上。古。より。彼。處。を。其。名。を。躡。り。言。げ。り
し。趣。不。聞。也。ま。ば。名。避。の。義。了。て。実。の。名。を。言。さ。し。お
こそ。斯。て。情。字。を。ナ。サ。ケ。と。訓。む。を。彼。處。を。情。の。本。處。ある
故。よ。是。は。ゆ。轉。して。物。此。哀。を。知。る。心。字。も。云。あ。ら。む。と。思

ひてナサケと訓しうど此ハその正き加くて眞心は語始の稱を以て云なき所ありぬあり。かくて眞心は語此本あるが。漢字を填れが即此を轉用して會具をも然稱するハ。彼處にカレ人の眞情也。疑結る依處の無れカレ也。伊藤長胤が辨疑録ハ情者好惡之實人心之無飾者也。古書中或替實字說曾子曰如得其情哀矜而勿喜。大學曰無情者不得益其辭左傳稱晉文公曰民之情傷益知之故或曰事情或曰情願好色之心人之所必有而最無傷者故曰情欲情實則相沿為好色之心示其心之所好而無傷者也。と云るを多く念く彼處に疑思はる時也。の注ハ陳氏曰男女及時之說聖人之慮天下也血氣既壯難益自檢情實既開奚顧禮義云々と見え。亦情字を會處に關係せる語いと多く念く彼處に疑思はる字情痴と名け彼處を人ハ委去る字情人或ハ情郎と云六朝遺事ハ煬帝戲月賓曰儂之愛汝只是情と云るあぜは會處を直ふ情と云へゆ。猶多うれど然のみ挙むこと煩し。但し此は女會を此み云ふ非交本とハ男根を

も云ふ哉思子也。麻宇良ハ男女に通る稱也。其ハ次文汝情時伊井諾守亦慙。扱まハ麻宇良を麻良とも云子ゆ。馬と何るよて著し。扱まハ麻宇良を麻良とも云子ゆ。夫は約言ハ多字を省くハ常あり。印度籍ハ梵語ハ根字母羅と云ひまハ麻羅とも云へゆ。さて彼大梵自在天王哉。麻羅と云ひ其ハ后神を毘摩羅天と有て夫婦共ハ麻羅と云を思子也。男女に通る稱あるあぜい。論あし。然依ハ女會哉。此方ふて然云子依こと。未その例を見交。けり男易を麻羅と云依ハは於靈異記ハ。開万良と見え。和名抄ハ。房內經云。王莖男會名也。楊氏漢語抄云。屢。亦作前一云麻羅。今案王篇等。と有也。此を今印本ハ。屢。破前一屢。鬘骨可為王莖義不見。と有也。此を今印本ハ。屢。破前一良。有れど麻字の下ある前ハ行あ也。あハ破前の前字ある物と見えとゆ。けり破前ハ元より假字也。但しけり意を用ひて書とる字ハや有む。或人云ハぜと

云魚あり形玉莖シ似ニあけて此麻羅マラてふ語を前マ思ヒけ
也。それ故ニ名ナけテさる。けり。古語拾遺シヨ。男莖ヲを袁婆斯ヲと訓メ。和名
抄シ。破前ハ。太秦牛祭文ヲ。大間オホマあどハ。是古名ナよテ。麻羅
ちふ名ナ也。中世ナの比丘等ノ事好ミふ。梵語ヲを以テ稱セる
の。世ニ弘クはれる稱ナらむ。あや太秦牛祭文ヲ。またハ。閩風
長キ八寸四伏ノ云フ。八ノと有リ。八ノ麻羅ヲ。其レ古事記ヲを始メ。古
羅ノちふ名ナは書等ノ數見エとリ。書キどもハ。天津麻羅命ヲ。大麻羅命ヲ。天都赤麻良命ヲ。天照眞良
建雄命ヲ。八ノと云フ。名ナ何レ也。姓ノ氏録ニ。麻羅ノ宿ニ。麻羅テふ語モし
元ト也。會具ヲを云フ。名ナあらば。其レを神名ニ負ヘ。法クも非ズ。神
名ノ麻羅ヲ。眞浦トも。麻ノ占トも。書キる例有れズ。此ハ万

葉歌ハ。且チ日照依嶋ノ御門ノ。鬱悒ノ志ハ。人音モ爲シ。祢ハ眞
浦ノ悲シも。と詠ス。眞浦ト同じ古言ナ。眞心ノ義ナれ
ば。借コそ天津赤占トも見エとレ。浦占トも。會具ヲを云フ
麻良トと。元ト也。別ニ也。思ヒ決シ。終テ在ル。此頃大
自在ノ天ノ神實ニ。天根ノ也。彼御ノ戈ハ。古傳ヲを思ヒ合セ
て。神名ニ。麻良ハと會具ヲを麻羅トと云フ。元ト也。古言ナ。
梵語ニ。自在ノ天ヲを麻羅トと云フ。我ガ古言ノ。彼因ノ傳ヲを
依テ。同語ナ。事ヲを解シ得ル也。我ガ友荻野長ハ。佛
とハ。別ニあらむ。思ヒ考ス。語ヲを語シ。長キ云フ。印度ノ麻良
華蔓ヲを麻羅トと云フ。是語ノ本ナ。自在ノ天ヲもハ。云フ。
其餘ノ華蔓ノ美麗ナル也。負ヘる名ト聞ケ。そハ我ガ

古、珠王を身の飾とせる哉思ふ。天津麻羅命と云ふ神名も由有て聞ゆれ。云々麻羅と云も元より此方の古言あるべし。猶今一度とり並べ彼これ思ひ合はる考牙よと云ふ催されたり也。神の名は麻良も眞心依止を。此處の情字は麻宇羅を訓まむ。論ひ無れ。御典を記せる人、其意を以て。此字をば書れむ。然まは男女此會處に通る名依と。既云云。御紀文にて著明依字。上より引く靈異記。和名抄。まと餘書等も。王莖此みの名として。今も然稱ふまど。此を後の事と爲法し。女會此名を鎮火祭詞。保止保神樂哥。會名久保桑家漢語抄。會門比奈登和名抄。小房内經云。王門女陰名也。通鼻楊氏漢語抄云。吉舌比奈佐伎。あど何。男易をヲバせと云。男柱の轉語と聞也。實子男の柱あり。但し此名ハ彼瓊戈を囿中此御柱

と爲給子。謂と正名。とりぬ。此不依て思へ。神ま。貴人を計へて。幾柱と云。こども師説を有れ。男莖を柱と云。より出さる語ある。扱ま。往年駿府。小物せ。同時。小原雄英老翁。語。男會を閉能許と云。古。同語。あらむ。閉能の切。保。ま。あり。由。死。説。入。ま。む。と。も。所。思。さ。正。し。く。と。今。思。へ。ば。少。の。由。死。説。不。非。也。但。し。和。名。抄。陰。核。也。有。ハ。字。彙。不。宮。刑。男。子。割。勢。亂。割。其。勢。者。則。陰。核。也。有。ハ。字。彙。不。宮。刑。男。子。割。勢。外。腎。也。と。云。ふ。語。と。あ。れ。り。名。の。趣。字。思。へ。む。莖。の。名。免。き。て。聞。ゆ。る。今。い。ふ。所。正。し。く。て。陰。核。の。名。と。せ。る。と。和。名。抄。の。誤。ら。む。也。知。る。ら。ば。衆。經。音。義。ハ。勢。峯。謂。陰。莖。也。と。何。正。餘。の。西。戎。籍。も。此。名。取。布。麼。羅。と。云。語。小。就。て。は。あ。る。う。面。白。き。名。あり。か。し。印度。不。謂。也。大。梵。自。在。天。王。を。云。を。始。免。男。易。女。會。此。名。也。も。此。と。取。總。て。印度。藏。志。の。大。千。世。界。品。末。節。の。處。に。諸。經。論。を。引。て。委。く。論。ふ。を。合。せ。見。る。法。也。盟。之。曰。言。義。

下ノ注^レル^シ。第三十^二段。○族離。族を本書ノ宇我^{ウガ}選^ラと訓注あ

也。親屬ま^レと親族。同族亦^レと有依を。皆志^レり訓^レ也。言義い^ハ

と考^レ牙得^交。安^安康^康天^天皇^皇卷^卷ノ^ノ等^等族^族とい^いふ言^言も^もあり^{あり}。師^師も^も宇

考^考ふ^ふべ^べし^しと^と。ち^ちて^て此^此は^は夫^夫婦^婦の^の御^御む^むお^おひ^ひを^を斷^斷給^給を^をむ^むと^と也。

也。其^其を^を上^上件^件の^の穢^穢く^く畏^畏き^き有^有狀^狀を^を御^御覽^覽志^志し^し。何^何ば^ば御^御後^後を^を追

て^て來^來坐^坐る^る御^御心^心也^也。失^失給^給ひ^ひお^おれ^れを^をお^おる^る。俗^俗お^おい^いそ^その

云^云心^心ば^ば。○唾^唾之^之時^時。和^和名^名抄^抄ノ^ノ唾^唾。和^和名^名豆^豆波^波岐^岐と^と何^何也^也。師^師云^云唾

は^は津^津吐^吐の^の意^意お^おる^る。と^と有^有也^也。十^十葉^葉ノ^ノ説^説あり^{あり}。ち^ちて^て唾^唾し

給^給牙^牙依^依を^を彼^彼穢^穢き^き有^有狀^狀を^を御^御覽^覽志^志て^て。其^其穢^穢死^死ノ^ノ得^得堪^堪給^給を^をレ

て^て也^也。御^御所^所爲^爲あり^{あり}。今^今も^も穢^穢物^物を^を見^見て^て堪^堪ぐ^ぐと^とく^く思^思。○速^速王^王之

男神。名義速ハ唾し給牙依狀の速う也と申せあり。

はと例のあふ稱とる言ふも有はし。王を津吐の形也。

玉も似とまをかくは申はる。神名式小出雲国意宇郡

小速玉神社。紀伊国牟婁郡熊野早玉神社。大○早字速小

此社を清和天皇紀貞觀元年正月廿七日從五位下熊野

早玉神從五位上。同年五月從二位。同五年三月二日正二

位。見え長寛二年賴業勘文小。天慶三年二月正一位と

何也。熊野新宮と稱は是なり。夫木集小。檢校法親王。お

をや玉をむらぶの宮や光そふらむ新宮とあり。さて新

宮とハ此社了並びて熊野坐神社ある小對へて云ある

べし。南紀名勝志小。熊野村新宮庄小。上熊野村中熊野村

下熊野村あり。今新宮村と云も。元を熊野村の内おれど

も新宮大神鎮座以後所名とせるが諸書小熊野村と云
るハ此処ある儘凡て年婁一郡を熊野と云るハ新宮
熊野村に因て云ふと見えとゆまに有馬村ハ木之本庄
木之本村の南二十町許小阿比村の中央に有馬と云処
北西辺に産田神社ありて伊弉冉等を葬する処也言傳
ふと云ゆ亦此熊野村のことと第七十九段熊成峯の
処委く云ふ○掃之時此を何を以ていふして掃給
を合せ考ふ○掃之時此を何を以ていふして掃給
予と云こせ今知なき小阿比祓若を御衣の袖小て
掃ひ給予るれらむの其心今も心よりぬ物を掃ふと
ては然為ること阿る字思べし

○豫母都事解之男神大事忍男神此二名義師云未だ事
解之男とは去の解字昔々阿佐加と訓ども然訓をきさ
ごうある證も例もあけまむ登祓あらむ
女神男神族離あるふ方小就て負せ奉阿し名れる哉下
小女神の御言ふ吾與汝已生因矣まよ伊邪那岐大御神
神功既畢御徳示大矣

もと有れむ夫婦離給ふも既小大取る事業の成竟し故
れまば此神名も其方小就て事解とも大事とも稱しお
らむ然まば此二名いひもて行らむ一意小當れ阿忍男
は例の稱お阿と有阿師の此説に依てれ布按了解と遂
も事を為し竟ること也速玉之男神大事忍男神此時
成坐る由を速須佐之男命の生坐る處小云依言を合せ
考ふはし○今世人夜忌燭一火者此其縁也ハ伊邪那岐
命の此時一火燭して見給予依あとの夜見おて有しお
せれると同じきを忌て世人の一火燭は燃と此おとあり
然まむ古燭火は二三もほといくたも燃物ありらむ

師云、今世も石見、綱あどふて、神子供、燈を、一とも
考こと、を、忌て、必、二口、ふを、も、し、ま、と、櫛を、攪る、ことを、吾
忌む、あり、と、彼、
困人云、巴、き、

於是伊邪那美命即遣豫母都

志許賣レコメ亦云豫母マタイフヨモ八人而令追ヤタリラテシメオハ

矣故伊邪那岐命拔御佩出十キカレイザナギノミコトヌカシミハカセルト

拳劔而於後手揮乍逃行取黑ツカツルギラテニシリヘデフキツ、ニゲイデ、シトリクロ

御鬘而投棄出則乃蒲萄子生ミカヅララテナゲウテタマヒシカバ、スナチエビカヅラノミナリ

矣豫母都志許賣キヨモツツシコメ撫食出間逃ヒリヒハムソラアヒダニニゲ

行然噉了而仍追則亦刺其右イデマスヲハミヲハリテナホオヒシカバ、マタサ、セルソノミギリ

出御美豆ノミミツ引闕湯津ラニヒキカキユツツマ栳櫛而グシラテ

投棄出則乃筍生矣豫母都志ナゲウテタマヒシカバ、スナチタカムナナリキヨモツツシ

許コメ女マタ又ヌキ拔ハミ食ソノ其タカ筭ムナ噉ハミ了ハリ而テ更マタ追オフ。
伊イヤヤハテハニハソノイイモイイガナミノミミコトミミツツカラ。
最シマ後ト則ニ其イ妹イ伊イ邪ナ那ナ美ミ命メ身ミ自ミ。
追オヒ來キ焉マシ。是コノ時ト伊イ邪ナ那ナ岐キ命メ已ニ到タリ。
坐マシ豫ヨ母モ都ツ平ヒラ坂サカ。隱カク坐リ其ソノ坂サカ出ル桃モ。
樹キノ下シ而タ。其ソノ實ミ三ツ箇トリ採テ而マ待チ擊ウ出タ。
樹キノ下シ而タ。其ソノ實ミ三ツ箇トリ採テ而マ待チ擊ウ出タ。

則カバ雷イカ等ヅ悉チ逃ド返モ矣コト。爾ニ伊ゲ邪カ那ヘ岐リ。
命ミ告コト桃トリ曰モ。汝ニ如タ助ハク吾イ。所ゴト有タ宇ス都ケ。
志シ伎キ青アラ人ヒト草クサ出ソ落オチ苦ウ瀨キ而セ愆シ苦テ。
出ム時ト可ト助ヨ焉タ詔タ出ケ而ト賜タ大ホ加カ牟ム。
豆ヅ美ミ命ノ云ミ名コト矣ト。此コ桃レ出モ避フ惡セ鬼キ。
命ミ告コト桃トリ曰モ。汝ニ如タ助ハク吾イ。所ゴト有タ宇ス都ケ。
志シ伎キ青アラ人ヒト草クサ出ソ落オチ苦ウ瀨キ而セ愆シ苦テ。
出ム時ト可ト助ヨ焉タ詔タ出ケ而ト賜タ大ホ加カ牟ム。
豆ヅ美ミ命ノ云ミ名コト矣ト。此コ桃レ出モ避フ惡セ鬼キ。

コトノモトナリマタヨルイムナゲグシヲハコレソノコトノモト
事本也。又夜忌擲擲者。此其縁

也。

豫母都志許賣八人は。御紀に醜女此云志許賣とあり。今
は此注と古事記に從て記せば。八人なり。本にヤツヒト此

を也。多理を訓るし。けて師説ふ。私記に。或説黄泉之鬼也

と云ふ。但し鬼とて。儒佛の書よとく鬼の意ふて非也。多

あり。書紀欽明卷に。魅鬼とあるも其意あり。和名抄に

女を鬼魅のけて名義を。形のおそろしく見悪き哉云ふ。

下文に。伊那志許米云く。と有ると同也。猶彼処に。とあり。

此八人れ志許賣を。上八色之雷神を。ある即是あり。上

十八段に言。けて此を。はと豫母都日狹女と云は。名義

いほご思ひ得。試ふ云は。和名抄に。販婦比佐岐女と

豫母都固の黄炊き此事を。掌る。卑き物と聞えと。巴

然より醜女と。ハ其容の醜きを。いふ。比佐岐女と。其掌

奉れる。巖き。巴。ぎ。と。り。云。る。不。有。る。き。伊。那。岐。命。を。追

け。短。き。鬼。此。如。き。物。を。レ。カ。三。と。云。ふ。此。レ。鍊。胤。云。世。小。多

小。を。非。ざ。る。け。て。又。ヒ。サ。メ。と。云。ふ。付。て。思。ふ。る。物。を。ヒ

シ。ハ。丈。短。き。物。と。見。ゆ。る。を。世。小。扁。み。て。潰。れ。と。る。物。を。ヒ

不。孰。れ。も。試。ふ。云。ふ。遣。而。師。云。都。迦。波。志。氏。と。訓。る。し。

御佩之十拳劔を。上。出。さ。す。後。手。心。師。云。手。を。後。さ

は子廻して物候るあ也。はた本物語小。志理子手小志を
 也云くと有也。揮乍師云古言子振を布久也も云し例。
 万葉小。草の山吹を山振とも書と也。風吹と云も振と
 通ふ。比神卷よ。振風。はと皇極紀小。揮劔とも有也。乍此
 戎爲れり。彼をも爲るを云辭あり。且くの約まりとる
 歟と有也。さて此處を豫母都醜女の追來るを防ぎまに
 御所爲あり。はまむ相向て防くと死を得逃給をぬみ依
 て逃おぐら防ぎは去故小。後手小物光給ふれ也。師も志
 也。○逃行師云行字は伊傳坐と訓法し。そは必出坐あら
 祓也。行給ふと云去也をも。然言ふ也古言あり。○黒御鬘。
クロミカヅラ

師云。凡て加豆良小ニの品有也。葛葛もと鬘と髪を有也。
 まお葛ハ葛クモりおら五味忍冬スヒカヅラれど。凡て蔓草ツルカサはとれり。
 鬘ハ頭の飾カサ小懸る物あり。古書子。蔓とも。鬘とも書り。蔓
れども。鬘意あり。鬘ハ鬘の髪ハ和名抄小。和名加都良カツラ釋
かきごま此異なるれり。名云髪少者所以被助其髪也と有りて。俗カ加毛カモ自と云
 物あり。如此はまぐ。はまごも本は一と也。轉れる名小
 て。草ハ葛カヅラよ也出る也。はて其葛の本ハ名を都良ツラまで古
 事記中。小登許呂豆良都豆良書紀万葉小。磨左葉サヤ返邏和
 名抄ナマシラ小。千歳チサイ藁ワラ百部ヒャクブおと云ひ。おれらの都良を加豆良の
畧と思ふ也。本末とが有り。忍冬スヒカヅラも字鏡ミタマキ小。は須比豆良スヒヒツラと有也。拾遺集雜下。はと須
あく。れり。瓜のち

ら見てもと詠るを蔓子類を云うけしあり今都留と云ふ都良のうねるあり弓の弦をも万葉に都良と云ふ馬具此漣鞆頭の都良も草此蔓よりぞ出々出漣を手綱此ことあり何れ蔓草を以て頭此飾ふかくるを髪葛と云ふ是即髪ありけり然髪小用ふるから立のりて草此葛をも加豆良とは云ふらむはと髪も髪を飾具ふまを髪とおふし名を負せ於冠年さて髪ハ上代了ハ女男せも小懸る物小て蔓草を用ひしとは石屋戸の段小眞折をけしを始て今云師古事記に依て眞折を髪せし由小言まされど此は誤りて眞折ハ手次あること其段の微論るが如日影髪おどはと必しも蔓れら祢ど花鬘菅蒲鬘柳鬘木綿鬘れどは也まれら母加豆良と云名まゝと絲おどを

以ても作正しふや珠をうさるまと天照大御神の御飾小見えとゆ今云此と第三玉鬘云は是なり髪小も玉うねらと云ふ此の玉鬘の名を移して安康巻小押木呼ふまゝと只不欠て云ふもあるべし玉縵と云も有て貴き寶お正しと見也万葉子波禰縵也云去々母何也縵字ハ此物小ても糸了ても造るる字多し縵も本の字義小たかはらて右の意もて用依あるはし○和名抄小花蔓を伽藍具子載されども此後もと天竺の人此頭の飾あり○今云万葉子波禰縵と有るも凡て縵ハ垂る物小るを波禰上るべく造るを云ふ也其在今世小童女の挂る波禰元結と云物元結とハ云へど髪飾小挂るも此元結と云物元結元結然思也けり此小黒とある色もて云れ依けれど何物小て何如作ま正せも知らぬ都豆良を黒葛と

ふ由蒲子の成まるふ就て思牙ば。此鬘のさは蒲葛ヒカクラふ
おし。玉を垂タレと依ヨる。彼實ミのあれる形カタふや似ニと正ただけむ色
此黒加ク正ただけむも。彼實ミふよし。ゆるよやと有り。○棄スハ。師
云。八千矛神の御歌。脱棄ツケを奴岐ヌギ宇氏ウヂとみ給へり。紀
吹棄フキ此コノ云クニ淨スガ積ツキ。此コノ依ヨて宇氏ウヂと訓ツケはし。○葡萄子ブドウ。師云。和
于コノ都ツ屢ツとあり。此コノ依ヨて宇氏ウヂと訓ツケはし。○葡萄子ブドウ。師云。和
名抄ナヒラキ。紫葛ムラサキ。和名衣比加ヒカ豆マメ良ラ。葡萄ブドウ。和名衣比加ヒカ豆マメ良ラ乃美ノミ
とあり。或説シふ。此物鬘ヒゲあてて。蝦エビふ似ニとる蔓草マンサウある故ユふ。
然名くと云フ。○撫フは。師云。字書ジショ。拾也シツとも取也トモとも注
せ。け。て比呂比ヒロヒ。比理比ヒリヒと古言コトコトふ云フ。○湯津ユツ抓ツ櫛シ。師云
比ヒてあり。ぬ。あ。○逃ニゲ行イデ然シ。然シ字ジハ。師シの行イ字ジを。伊傳イデン坐マ袁ノと
とあむ有り。

訓ツケれある袁ノふ。何ナニも。加カ。さるあ。○湯津ユツ抓ツ櫛シ。師云
前マふ。男柱オトスを取トリ闕カクと。何ナニも。を。此コノは。多ヒキ引キ闕カクと。何ナニも。
引ヒキと取トリと。凡ヒトの齒ハシ。中ナカ。引ヒキ闕カク。多ヒキ引キ。又マタ前マある
は。左ヒダリの御ミ髻マツ。右ミダリの御ミ櫛シ。○筍タケノコハ。師云。字
鏡カガミ。小コ。筍タケノコ。太タカ。加カ。牟ム。奈ナ。和名抄ワナヒラキ。小コ。も。筍タケノコ。亦モト。作シ。箒ハシ。和名ワナヒ。太タカ。加カ。無ム。奈ナ
と。何ナニも。後ノチの物モノ。多ヒキ加カ。宇ウ。奈ナ。と。凡ヒト。て。凡ヒト。て。名ナ。此コノ。意イ。竹タケ。芽メ
菜ナ。あ。巴ハ。菜ナ。を。食クハ。ふ。添ソ。て。喰クハ。物モノ。の。凡ヒト。此コノ。名ナ。ハ。巴ハ。か。ま。バ。筍タケノコ。も。
竹タケ。子コ。と。云クニ。故コト。小コ。哥カ。子コ。と。竹タケ。子コ。と。此コノ。ハ。櫛シ。の。齒ハシ。狀カタ。竹タケ。子コ。の。竝ナラ
立タテ。る。小コ。似ニ。と。り。下シタ。ノ。鹽シホ。土ツチ。老オシ。翁ノ。が。玄ソノ。櫛シ。を。投ナゲ。じ。ら。ば。五イ。百ヒャク。箇コ
竹タケ。林ノ。子コ。あ。れ。巴ハ。と。有ア。る。も。此コノ。類ルイ。あ。巴ハ。○最モト。後ノチ。ハ。師云シヨク。神武カムヤマト。卷マキ

伊夜佐岐陀氏流とある。大御歌詞に依て伊夜波氏と訓る。人の御哥此前詞に最を弥の下に出せり。○拾芥抄云言を彼大御哥大名牟遲神段も於最後來坐せり。枕冊子にさいをて此車と云る。最後之車あり其頃最字を音了てぞ云む。今言は最前と音了て云も。もと伊夜佐伎てふ波氏とは何事はれ。物の終を云こ言とりぞ出れむ。○身自は師云美豆加良を訓はし。常ふを自一字をみおらと訓免どもおのちみら。己自ておら。手自くちお加飛。口自おぞを云。牙は自は加良ふて。みおららは身自は。今云此餘に圍がら人がら日自あるは柄。○桃樹木の名は物不見え。さる始。○の意おむ非心。

待撃之ハ。師説ふ。來るものを待受て打おゆ。景行卷ふ。倭建命此蒜の片端を以て。足柄此坂神を待打あるふと何依ふ同じ。古言了は待問待取待攻待戰待向。おぞ云るおぞ多加也。此を早く來むこと欲はるを待と云とを異。語おども待云くと云語おふし。○今云伊勢山田辺の物。て磔を打ことを白桃をくらむせると云とぞ。此お由何。おげ。お何也。○悉ハ。師云許登基登通と訓はし。火遠理命。まよ万葉五卷。○如助吾とは。師云。即今古の桃子を以て。お見えあり。○迫追來し者共を撃退けて。難を此ぐま給ふ故。お詔ふ也。○所有ハ。阿良由流と訓はし。伊波由琉と同格の言ふ。志て。共お古言お也。由流伊波由琉おどを。漢籍誌の

言とのみ思ふて誤あり。凡てからぶみ。○宇都志伎青人
よこよ古言の遺れ。はこ多きぞあり。○
草御紀ふ。顯見此云。宇都志伎。師云。私記ふ。顯見者。
見在之義也。とあり。か。れ。宇都ハ現志伎。嬉悲の類。
此志伎。ふて。辭あり。神武紀。顯齋此云。干。詩。怡。破。毘。統。
紀。十。宣。命。宇都志。久。母。あり。とあり。
け。て。人。草。此。事。を。如。此。詔。ふ。を。書。紀。大。穴。年。遲。命。の。御。言。ふ。
吾。所。治。顯。露。事。者。皇。孫。當。治。吾。將。退。治。幽。事。云。く。か。く。幽。冥。
事。ふ。對。て。顯。露。事。と。云。ふ。が。如。く。目。不。見。え。之。顯。あ。ら。ぬ。神。
は。對。て。顯。さ。る。世。人。と。云。ふ。と。ぞ。應。神。卷。ハ。神。習。青。人。草。習。
を。神。ハ。對。子。雄。畧。天。皇。の。葛。木。神。の。形。を。顯。し。て。見。え。奉。り。
て。云。ふ。か。り。雄。畧。天。皇。の。葛。木。神。の。形。を。顯。し。て。見。え。奉。り。
給。ふ。を。宇。都。志。意。美。と。詔。へ。る。ま。と。師。說。ふ。万。葉。ハ。空。蟬。借。字。

○宇都曾臣あど。あるも。み。あ。顯。志。き。身。と。云。ふ。と。れ。也。と。
ある。は。と。現。心。夢。現。あ。ぞ。の。現。み。れ。同。言。あり。青。人。草。と。云。
所以。次。の。文。ふ。千。人。死。千。五。百。人。生。と。ある。意。ふ。て。草。の。
彌。益。く。小。生。茂。む。ひ。あ。ゆ。よ。譬。さ。る。稱。あ。り。青。を。し。も。云。ふ。
小。心。を。著。げ。し。私。記。ハ。貴。人。を。木。と。云。ふ。と。賤。民。を。草。と。云。ふ。と。云。説。を。非。と。せ。あり。故。此。稱。
は。神。の。人。の。利。益。を。爲。給。ふ。と。云。ふ。人。ハ。損。害。を。爲。給。ふ。と。
と。云。ふ。此。み。必。用。ふ。稱。あ。り。神。の。人。を。利。益。と。さ。ふ。と。千。五。
を。あ。け。ハ。其。逆。ひ。敵。む。あり。故。共。了。此。稱。を。云。れ。め。古。書。
ど。も。を。く。見。通。し。て。眼。を。著。意。し。予。云。と。の。虚。り。古。書。
ざ。る。と。自。ち。と。云。ふ。○。の。ら。困。ハ。蒼。生。黔。首。と。云。意。
を。甚。く。異。あり。也。然。此。文。字。を。迷。て。意。を。と。正。誤。り。と。
勿。ま。書。紀。ハ。蒼。生。と。作。れ。る。い。と。多。る。と。○。苦。瀨。ハ。師。
ま。似。と。る。稱。の。文。字。を。取。ま。と。る。の。み。あり。○。苦。瀨。ハ。師。

と抄ける言ふを何ら神於実此號を奇功を美てか
 小大てふ言多添て稱へしあり。○今云豆美の義を師の今一
 の神とは稱牙給ひしなり。○考牙も有て山津見此津見
 と同じ意小解れとまど此豆。○此桃之避惡鬼事本也。師
 美之之実の意不ぞ有べき。云桃の後世まで鬼魅を避るハ此大詔ふれ也。漢籍小
 のさる功能あること哉これうま小記せるを見れむ御
 困れみあら交外困の未までも此大神の大詔の驗あり
 り依ふと知られていと貴し。○今云ふ不第十二段瓠川
 菜の火を鎮むる功能あるとを云ふは注せる説と
 もを合せ考べしさて尾張困あぜふて雷の鳴るとき童
 子ども此雷よ落と桃木で多く加ると云とぞ此の故事
 小由あること。○又夜忌擲櫛者此其縁也。擲櫛ハ那宜具斯
 とあるはし。即本書小然有也。櫛字擲ると訓其を本ハ櫛を
 ぞ訓はし。擲ると非あり。其を本ハ櫛を
 擲ると志れまど。既其事の稱ふれまざる語なれむなり。

事本也ハ聞えあるが如し。
 然れど其解を記傳三十
 四卷四十八丁小見也。

於是伊邪那岐命以千引磐引

塞其坂路而中置其石各對立

而度事戶出時伊邪那美命白

曰愛出吾名妹命汝如此言則

アハイシノクニノヒトクサヒトヒニチカシラナトクビリ
 吾汝圀出人草。命日千頭將絞。
コロサマヲシタマヒキコニイザナギノミコトノリタマハク
 殺白給矣。爾伊邪那岐命詔曰。
ウルハシキアガナニモノミコトイシレシカシタマハバアレ
 愛出我汝妹命。汝然爲出則吾。
ハヤヒトヒニナタテ、チイホウブヤヲヨリコ、
 哉。一日當立千五百產屋。自此
コナタヘクナトノリタマヒテスナチナゲウテタマヒソノミツエラ
 以還莫來詔而。卽投棄其御杖。

キコ、ヲモテヒトヒニカナラズチビトシニヒトヒニカナラズ
 矣。是以一日必千人死。一日必
チイホビトナモウマル、
 千五百人生也。

千引磐之。師云知毘伎伊波と訓はし。知毘伎能ととまぬぞ。古言の格なり。
 此を書紀ふ。千人所引磐石を書れ多るは。稱此意を顯せ
依れ也。万葉四小。吾戀ハ千引の石を七ぞ加也。頸小繫む
も云く。和名抄子也。知比木乃以之とあり。私記も同じ。か
有れども。石ハ伊波と訓ぞよき。はと下ふ。五百引石也云も見也。○引塞
之。師云比伎佐閑と訓はし。佐閑ハ令障亦也。それらせを切
れバ閑あり。

令合を阿聞と云。下ふ。以五百引石取塞其室戸也。引と取とを同じと云。同じと云ふは、上は櫛如是爲て。追來坐の齒を引闕とも取闕ともあるが如し。如是爲て。追來坐。依女神を禦留免奉正給ふ。○各對立而ハ。師云。阿比牟伎多志氏と訓法し。万葉ハ。天漢相向立而。向立。河。おどほ。書紀。此を相向而立と書。○度事戸ハ。許登度袁和多須と訓法し。其は御紀。建絶妻之誓と書。絶妻之誓。此云。許等度とあり。私記。度者猶如言度。師云。今俗言。人不受持。さむべき事を。言付るを申渡。似と云ふ。さて許登度。ふ。あ。御紀。書れ。依字。大意。聞え。荒木田。久老説。万葉二卷。狂言等。も。二所あり。十七卷。多婆許登。の。も。と。も。

書。七卷。事等有。十九卷。神言等。ま。公之事跡。乎。依て考る。此ある事戸ハ。御誓言。此切。依を云。あらむ。神代紀。大諄辭。此云。布斗能理斗。下の斗は。事戸の戸。同じ。依。万葉集中。例多く。皆。此事を。切。い。比。きは。む。添。意。ハ。同じ。添。の言。後。の哥。も。見。今。の哥。人。を。言。用。ひ。ぬ。云。て。例。を。多。く。舉。依。字。其。は。此。人。の。万。葉。解。小。就。て。見。る。之。事。跡。乎。と。引。さ。る。万。葉。十。九。卷。公。伴。家。持。の。哥。玉。梓。之。道。尔。出。立。往。吾。者。公。之。事。跡。負。而。之。將。去。と。有。今。其。意。を。考。ふ。依。年。ま。祢。親。み。扱。る。人。と。今。立。別。れ。か。む。事。の。い。と。哀。く。悽。め。し。思。也。よ。付。て。事。戸。ち。ふ。言。を。絶。妻。之。誓。と。も。あ。り。て。妹。春。の。中。

さ予ふ末永く絶離る程此事をまば中々今餞別
何ぢる公とゆその離別の誓する事跡をし於此を
賜て正負持て夫婦小をあら神と馴親み於る睦びを断
て出立むすは却りて心安のら年を離別を悲しみ思ふ
餘て此段の故事に依てか○如此言則とは石を引塞
くは詠出られあるるべし○汝国とて此顯国をさけち抑
て事戸を度し給を云○汝国とて此顯国をさけち抑
御親生成給予依固哉しも加く他げ小詔ふ彼固此固の
隔てを思へば甚も悲哀死御言小ざりる○千頭師云
千人と云ぶきを如此詔ふて絞よ扱きと依御言ち同
事を次すは千人死と云ふふ合せて思ふるし書紀すは
千五百頭と書れとる何ぞや多文よ○絞ハ師云字
拘りて古語を思ふさぬ故のまじさあり○絞ハ師云字
鏡小縊絞也經也久比留と何て頸を去て殺けを云漢
国

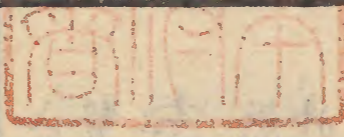
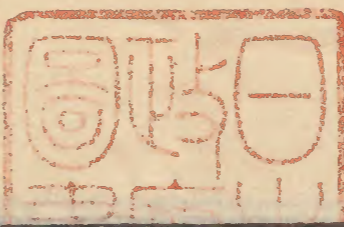
の代々此死刑の中小も絞と云さて今多殺と何らて
有り周礼小磬と云も此あり絞殺とあるはいせ上代
人を殺すはもはら絞し小
や有らむまは殺小さま何る何も身は傷を多絞
え祢むのくのみ傷に故神の殺し給ふ其跡あらは小見
云ふりや○然爲之則師云絞殺をさけ上りた如此爲
せ云ひあくふはかく云は文を加予あるれみあら更凡
て加久と志加せむ細く云ハ差何也加久を我り於死と
依事まはちし當て多依事を指て云志加は向ふ人未多
向ふ物ふ扱支とる事まはその言事ふどを指て云此と
其との差此如し文章よ上字承て云
然せを通ハ志て云る古事記中ふ有万葉四ノ吾
背子が如是

恋れこそ云ふかどのゑぐひた。○産屋を末ふ其事見也。然と云はきを如是と云たり。○産屋を末ふ其事見也。彼處ふ注はし。第百六師云。今多産むとは詔ハて立産屋としも詔するは上代の言ふ。子を生れ然云ふらはし。らむ。榮花物語根合。大將殿も女御の御産屋四月れる。ふ。今二月三月を以てさせとるは去るにぬるいみじう。うち残しうたぶしおげく云く。おれも御産のあとを御うぶやせ云ふ。○師云。上の將統殺を久毘理許呂佐那。おの當立を多氏く。那と訓はし。其を崇神卷歌ふ。伊傳氏由加那出て行。仲哀卷忍熊王歌ふ。迦豆伎勢那和潜せむ。はと伊邪阿波那和禮波いざ逢む。万葉一了。去來結手名。

いざ結て。まると二了。君爾因奈名君小因。はと玉藻莉手むあり。おれら牟と云はき残那と云てむをておれむ。古語の一此格あり。はて如此交ふ詔ふを多からむ。おをを云ふて。必志も千と千五百の數小限らむとふは。非交。○莫來ハ。久那と訓はし。其を此小因て。成坐る神の久那斗神を申は御名を負坐る本因の處おれむ。○杖を和名抄ふ。杖和名都惠を何。○千人は。師云。知比登千五百人。知伊富比登と訓はし。凡て人の數を比登理布多理美多理與多理おぞ云。皆古言おれど。仁徳卷哥よ。比登理書紀同卷の哥よ。赴駄利。又夜儂利おとあ。但し三人四人おと此例を以ていは。一人二人。

をも比登多理布多々理を云はき小是のみ比登理布多
理と云を比登理を多を省き布多理を多を約多を
云云云々書紀神武卷小一人を毘儂利と何るも登多を
約於て儂と云るありさて右の駄儂ふどの假字に依ら
ば何を登多を濁るべきやとも思ハるまど記す比登
理と何れを此に准ずて皆常ふ云如く清むはきありさ
て又さきまハ書紀に五婦人をイッテ清むはきありさ
をイッテおど訓る人ハ一人座二座三座四座の
切に四座の言も一人ハ一人座二座三座四座の
人座四座の言も一人ハ一人座二座三座四座の
効ひて後お設する言も一人座二座三座四座の
紀此歌も愛彌詩鳥毘儂利毛く那比苔蝦夷字一人と
依如く若干比登とぞ云きむちまむ書紀小醜女八人又
垂仁紀も壹百人れどある
訓も古言
あるべし
○死ハ師云志邇と訓はし雄畧紀の歌も伊能
知志那麻斯と何也お布万葉も
數あらば多し古言お也今云第九十
八段に見え

とる沼河比賣歌も伊能知波那斯勢多麻比曾とある斯
勢を令死ふて去き死てふおとの哥も見えとる始り
志爾ハ過去お也須岐を志を切る志奴留ハ過去るあり
然るを志邇を死字
此音と思ふは非也
○生也師云世小日く小死る人と也
も生るるが多加るは今此御言も由ま也大祓詞も國中
爾成出武天之益人等と見えおと青人草と云も此意お
依おと上ふ云るが如し凡て人の死るは豫母都大神の
御所爲もて此の千頭將絞殺と詔す依御言の驗小因也
生出るは伊邪那岐大神の御恩頼ぞかし漢因ハ此傳
をえおらで天
命おと云あるを聖人此託言も欺れ
ま空理を信あるひがおとあり
千五百人那母と訓
む那母ハ續紀に宣命おぞふいと多死辭して後世の文



章ユキ小コ那ナ牟ムと云是レ丸マゆ。那牟を那母の

○鏡胤云。此卷を板イ彫ウらせム依ル者ヲ。甲斐国巨摩郡

江原里人内藤昌實同郡古市場邑小住ル。矢崎隨美ト

同所ニ有ル。矢崎豐長ト也。

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 丸, 依, 者, 甲斐, 国, 巨摩, 郡, 江原, 里, 人, 内藤, 昌實, 同郡, 古市場, 邑, 小住, 矢崎, 隨美, 同所, 有, 矢崎, 豐長, 也.]



